
夢と願いの学園恋歌

surteinn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢と願いの学園恋歌

【Nコード】

N3948V

【作者名】

surteinn

【あらすじ】

夏休み最後の日。神崎宗一は街中まちなかを歩いている時、一人の少女を交通事故から救った。数週間後、その救った少女が学園に転校してくる。「勝負は学園祭！先輩のハートを見事キャッチしてみせます！」「俺、学園祭当日は風邪で寝込む予定なんだ」「確信犯な君に文つちが甘〜いお見舞いをプレゼントしてくれるって」「宗くんは誰にも渡さない」「あんたら少しは落ち着きなさい」「今度こそ彼女を百人作ってやる！」「不純です」「お茶でもどうですか？」転校生の少女が嵐を起こし、学園祭を通じて少年少女たちの関

係は大きく変わる！ ハイテンションラブコメディ、ここに誕生！

8月31日(1)

ズキン。

頭が割れるような激しい痛みが俺を襲う。

ズキン。

脳を無理やり締め上げ、捻られる。大きな手が脳味噌を握り潰そうとしているような違和感と激痛の融合。いや、今度は引き千切ろうとしている？ 分からない。何故こんな痛みを与えられているのだ。何故耐えなくてはいけないのか。分からない。これは何だ？ 脳内をぐちゃぐちゃに掻き混ぜられている。止めて。止めてくれ。もう既に罰は受けているだろう？ 彼女の によって俺は苦悩し後悔し、そして のだ。だから。だからさ。

お願いだ。俺たちを救ってくれ。

白い光が目飛び込んでくる。

眩しい。

まず最初に抱いた感想はそれだった。まだ働いていない脳に喝を入れ、時計を確認する。時刻は午前六時四十五分。もうそろそろ目覚ましが鳴ろうかという時間であった。一瞬このまま起きるか、はたまた二度寝をするか。どちらの選択肢を取るか迷った。しかし、この問題はすぐに片づいた。

「寝るか」

布団にもう一度くるまると、静かに眠りに落ちていった。

午前七時。夏休み最後の日。茹だる暑さに耐え切れなくなり布団から飛び出したのは、二度寝という選択肢を取ってから数分後のことだった。こんなことなら素直に起きれば良かったと後悔する。きつと寝起きと暑さの所為で思考回路が上手く繋がっていないかったからだろう。身なりを整え、階下に行く。下っている途中、何リビン

グから何やら香ばしい良い香りが漂ってきた。右折し、すぐ近くにある左手に位置する部屋の中へ入る。

右前方で、一人の女の子が背を向け、鼻歌を奏でながらキッチンで料理をしていた。その後ろ姿が誰のものかは知っている。

桜木 文。

小学生の頃からの付き合いで、俺の家の隣人でもある。いわゆる幼なじみだ。

「おはよう、宗くん。今朝は早いなだね」

ドア付近で突っ立っていると、物音で気づいたのか、文はこちらに振り向きにつこりと微笑んだ。お玉を片手に台所に立つエプロン姿の幼なじみは、なんだか様になっていて、まるで熟練した主婦みたいだ。

「おはよう。今日はベーコンエッグか？」

「そうだよ。もう少しで完成するから待っててね」

文はそれをフライパンから皿へと移すと、手際よくサラダ、果物を盛りつけていく。十秒も経たない内に見事朝ご飯の準備を終えた。

「それじゃあ食べようか」

「ああ、そうだな」

二人とも席について頂きますと言った。

これはかれこれ五年間続いている光景だ。俺の両親は仕事柄、海外へ出張することが多く、一年の大半は現地暮らしとなった。そのため俺は一人暮らしを余儀なくされる事になる。別段不満も特になく、むしろ一人暮らしをしてみたいという数ある願望の中の一つが叶えられ舞い上がったのだが、それはぬか喜びであった。重大な欠点があったのだ。

俺は、料理が、できない。

練習すれば出来るかもしれないけれど、やる気が出ない。最後に料理したのは小学六年生の時の調理実習以来だ。包丁の握り方？ そんなのあるの？ というレベル。とてもじゃないが、料理なんて

出来そうになかった。

紆余曲折あり、文が家に来て料理を作りに来てくれることになったのは、両親が初めて長期の出張に出る二日前の事。妙に張り切った様子で「宗くんの健康、体調管理はお任せください！」と宣言したのは今でも忘れない。

それから二年半、こうしてほぼ毎日来てくれ、大半の家事を任せてしまっている。俺の心の中は言葉で言い表せきれないほどの感謝の念でいっぱいだ。今は大した恩返しは出来ないけれど、いつか必ず返したい、そう強く思っている。

「どうか。今日はいつもより上手くいったんだけど」

「うん。焼き加減も塩加減もばっちり。すごくおいしいよ」

「本当？ よかった。喜んでもらえて」

えへへと笑う文は本当に嬉しそうで、見ているこちらまで幸せな気持ちになってくる。将来文は良い嫁さんになるなあ、とぼんやりと考えた。

「夜もよろしくお願いします、文さん」

「了解。いつか宗くんが私にごちそうしてね」

「特製サンドイッチをごちそうするから、期待して待ってる」

「ピリ辛の？ うん、楽しみにしてるね」

文の笑顔に少しどきまぎしながら、これからもこんな日常が続いていって欲しいと願った、とある朝のことだった。

昼過ぎ。昼食を済ませた後は特にやる事もなく、俺は適当に街中を散策していた。街は人で溢れかえっていて、雑多で。賑やかというより騒がしいという印象を持たせる。人込みは幼い頃から苦手だけど、この程度なら我慢できる。出来なかったら今頃病院か道端で野垂れ死んでいる。

角を曲がり、あと三メートル弱のところまで信号が赤に切り替わった。運が悪い。夏の蒸し暑い外気に晒されながら立って待つなんて拷問に等しい。熱中症対策はしてきたものの、今日に限ってはあま

り効果は期待できなさそうだ。

小さな陰すら見当たらない。辺りには花壇や電信柱といった街でよく見かけるオブジェクトが点在し、老若男女、多種多様な服を身に纏う人々が大きな波、集団を形成している。特に目の引くものはなく、何の面白みもない光景には多少なり嫌気が差した。

仕方なしに横断歩道近くで待機していると、ふらつと、足取りの覚束ない一人の女の子が視界に現れた。小柄な、髪をサイドポニーにまとめた活発そうな女の子。しかし、それは外見の話。顔色が青く、体調が非常に優れていないのが遠目でも見て取れた。

大丈夫なのか。いや、決して大丈夫なんかじゃない。

心配になってきた俺は少女の傍に駆け寄ろうと足を一步踏み出した。その時。

少女がふらつと道路に躍り出る。

右側から迫る大型トラック。

少女に気付いた様子はない。

気付く余裕はない。

頭の中を駆け巡る一つの映像と、巻き戻しなど出来ない現実が一致しようと徐々に近づいていく。

そこから次に起こりうる事を理解したか、していないかの曖昧な瞬間に、俺は全力で駆け出していた。思考が一つに束ねられる。頼む。間に合ってくれ！

トラックが前方を通過する。キーツという甲高いブレーキ音が辺りに響く。歩道待ちのところで倒れこむ俺。その横で倒れている少女。

良かった。間に合った。

すぐさま立ち上がると少女を抱き起こす。

「大丈夫か？ 意識はある？」

少し揺さぶり少女に問いかける。本来はあまり衝撃を与えない方

がいいのだが、今はそんな事に構ってられない。軽く三度ぐらい揺ると、少女は薄っすら目を開け、「はい」と、蚊の鳴くような声ではあるが返事をしてくれた。意識はある。何処か、日陰のある場所はないのか？ 前方の市営公園が目についた。あそこなら横にもなれるし、体力も回復するだろう。大分楽になるはずだ。早いところ行かなきゃ。

少女をお嬢様抱っこの要領で持ち上げると、青になり騒がしく行き来する人並みを避けつつ目的地へと向かった。

それにしても、何故少女が轢かれそうになった時も、その後も、誰一人として俺たちを見もしなかったんだ？ 関わりたくないという理由だけでは不十分過ぎる。不自然過ぎる。人が危うく死にかけていたんだ。大騒ぎになって当然だというのにこの様子。何かがおかしい。けれどいくら考えたところで解決されそうにない。

なあ、世界ってここまで薄情だったっけ？

8月31日(1) (後書き)

さあ、早速シリアスですよ。

冒頭からハイテンションを期待していた皆さん。すみません。

どうも、この凡骨作者はシリアスを入れたがる癖があるっぽいんです。次回、次々回くらいから冒頭のあれ何なの？ といわれるくらいぶっ壊しますので、どうか見捨てないで下さい。

意見・指摘などがありましたら感想の方まで！

では(・(・(ノシ

蝉の音が耳朵を叩く。雰囲気、固定観念があるからか、聞いているだけで体温が二度も三度も上がっていくような錯覚が起きる。脳では錯覚と分かってはいるけれど体は分からない。汗が目に入りひりひりとした痛みが走る。早く秋になってもらいたいものだ。

公園に無事到着すると、最寄にあるベンチの上に少女を素早く且つそつと寝かせた。ベンチは木で作られているため、後頭部にあまり大きな負荷は掛からないだろうが、一応リュックサックを下ろし、それを枕にして頭を乗せてやる。

「おい、起きてるか？」

確認のため声をかけてみる。頷くのみだったがそれで十分だ。意識の有無さえ分かればいい。リュックから予め取り出しておいたスポーツドリンクとタオル、水の内スポーツドリンクを手に取る。

「これ飲め。少しは楽になる」

少女の頭を僅かに持ち上げ徐々にそれを口に含ませていく。少女はコクコクと音を立てて飲んでいき、直ぐにペットボトルの中は空になった。ペットボトルを近くのゴミ箱に放り投げると少女が声を出した。

「あの、ありがとうございます」

調子がある程度取り戻したらしく、少女はベンチを支えにして、上体を起こし、ベンチに腰を下ろした。立つ事はまだ無理そうだ。

「水も一応飲んでおいたら？ 体温は下がっていないさそうだし、脱水にもなってるし」

「いえ、いいです。これ以上して貰っては」

「それでまた倒れたらどうするの。意識がはつきりしているのなら、あとは水分とって安静した方がいい。ついでにタオルで汗拭いて」

少女は明らかに熱中症にかかっている。正しい対処方法は知らな

いが、一応考えられる限りの処置は尽くした。あとは病院に行つて検査して貰つた方がいいだろう。

「はい、お言葉に甘えて」

水を受け取つた少女は先程よりも速いペースで飲み干した。少女はふうと息を吐き、体に水分が染み渡るのを感じるように目を閉じている。俺は彼女の横顔を盗み見る。

今気付いたけれど、この子かわいいな。まだあどけなさが残るが、顔のラインがすっきりとしていて、肌はふわふわと柔らかそう。たまご肌と言つたっけ。また髪を上げた事によって見えるうなじはどこか色つぼさを感じる。髪は艶やかな黒、オレンジのリボンで纏められ少女が動作するたびにゆさゆさと揺れる。

「どうかしましたか？」

視線を感じたのか、少女は俺に向き直るとちょよこんと首を傾げる。内心の焦りを見せないよう平然とした姿を装う。

「いや、具合は大分良くなったかなあとと思って」

「はい、楽になりました。本当にありがとうございます。なんとお礼を言つていいのか」

「目眩とかだるさはない？」

「多少だるさは残ってますけど、目眩は全くないです」

「そうか。でも念のためあと二、三分は座つて休んで。立ち上がるときはなるべくゆっくり。もしまだ体調が優れないようだったら必ず病院に行つて」

俺の言葉に真剣に頷き返す少女。俺が言つた内容は誰でも思いつく事なのかもしれないけれど、どうやら俺は根っからの心配性らしい、ちゃんと伝えておかないと済まないみたいだ。

少女の顔を見る。……。うん、顔色は良くなったし目もすっかりしている。俺に出来る事はもう無さそうだ。

「これからは体に気を遣つて。じゃあ」

手を振り、その場を後にしようとしたが、「ちょっと待つてください!」と比較的大きな声で呼び止められた。何か言いたそうだ。

「あの、もし差し支えなければ、名前を、名前を訊いてもいいですか？」

俯き気味に、目をあちこち泳がせながら少女はそう伝えてきた。

名前。何故訊くのだろうと疑問に思ったが、特に気にする事でもないと思い直す。

「俺は神崎かんざき宗一そういち。高校二年生」

「私は和泉いずみ宙そら。高校一年生です」

一つ学年下か。もしかしたら同じ学校で、廊下ですれ違っていたりしていたのかもしれない。

「本当に助かりました。命を救っていただいただけでなく、看病までしてもらって」

看病というほど大げさなものでもないけどな。せいぜい手当て程度だ。

「あの、神崎さん。助けてもらったお礼に何か恩返しをしたいんです。なので、何でもして欲しい事とか欲しい物とかあれば何でも言っして下さい！」

「えつと和泉さん？」

「はい！」

勢い良く返事する和泉。やる気満々だ。どうする？ 別に見返りを求めて助けたわけじゃないし、和泉が助かっただけで十分なんだけど。

だんだん考えるのが面倒になってきた俺は、とりあえずさっき自分が思ったとおりの事を言う事にした。

「俺は和泉さんの命を救えたっただけで十分だよ。だからお礼はいらない」

うわあ、我ながら臭い台詞だな。

「じゃ、またいつか会おうね」

再度手を振り今度こそ別れを告げる。向こうも手を振り返してくれた。リュックサックは……. やばい、置いてきてしまった。まあ近々買い直そうと思っていたから丁度いいか。

公園を出る。空には大きな入道雲。夏が過ぎ去る日はまだ遠そうだった。

「……………神崎宗一先輩、か。はい。またいつか会える日まで」

夜、夕食を済まし、テレビをつけ文と二人でドラマを楽しんでいた。最近流行の学園痛快コメディで、画面の向こう側では色々あり得ない出来事が繰り広げられていた。前転で百メートル走とか、騎馬戦で真剣が出るとか。特に後者は死傷者が絶え間なく出てくるだろうな。あ、主人公が白刃取りした。

「ねえ、今日何か面白い事あった？」

「今日？ 特になかったけど」

「そうなんだ。あ、口からナイフ飛ばしてる」

「今回は一段とはっちゃけてるな」

「本当に何かなかったの？ 幽霊が出たー、とか」

「昼間に出る幽霊なんて聞いた事ないぞ。そついえばさ」

「なにになに？」

「大変なことがあってさ。ほら十字の交差点があるところの歩道でさ……………」

「へえ、そんな事があったんだ」

「通り今日の出来事を伝えると、文は何かを探るような目で俺を見てきた。」

「その子、可愛かったりする？」

「いきなりどうした。確かに可愛かったかと思われれば可愛いな。聞かれなくても可愛いとは思っけど。」

「どれくらいー」

「どれくらいって言われても」

「私を基準にして！」

「何でお前を基準にするの!？」

「楓ちゃんでもいいよ」

「なんで暴力女」

「ミキちゃんでもいいよ」

「猫と人を比べるのかお前は」

たまに文の感性が分からなくなる。猫の”かわいい”と人の”かわいい”は違うだろ。

「ほら物語が佳境に差し掛かったぞ。あのイベントはここに繋がってたのか。びっくりだ」

「誤魔化さないで」

「ちよつと、文さん？ 目が怖いのですが。本気を出すときの目と同じだぞ？」

「本気だもん！」

「何に本気なのかさっぱりだ！」

その後、やけに突っ込んでくる文をいなし、話を有耶無耶にした。帰宅する間際まで文が詳しく聞き質そうとしてきたが、また明日にでも伝えると言い、送り届けた。明日までに忘れてくれる事を願う。だって言うの恥ずかしいだろ？ どちらも可愛いよ、ってぞ。

(2) (後書き)

次、テンションMAXでお届けします。

基本、この小説は作者の妄想やらぶっ壊れた脳内の出来事を書き綴るので、

たまに何の脈絡もない話が出てきます。

ちなみに一人ギャグ要員として「骨折られても、血が飛び出ても次の瞬間には復活する変態」が登場するので、ぜひ楽しみにしてください。

誤字脱字・指摘・意見などがありましたら感想の方まで。

では(・・・)ノシ

宙「ついに私の本性が……!!」

宗「大人しくしろよ」

宙「私のハートが火を噴くぜ」

文「大丈夫だよ宗くん。私がついてる」

宗「お前が一番怖いんだ」

9月16日(1)

「そういえば噂で聞いたんだけど」

九月十六日。夏の空気が秋のものへと変わっていく時期。大雨が頻繁に降る季節でありながら、ここ数日は天気が崩れることなく清しい青空を展開していた。唐突に文が切り出してきたのは、朝食を普段通り摂っている時であった。咀嚼していたものを無理矢理胃の中に押し込み、先を促す。

「うわさ？」

「そう。今日学校に新しい子がやってくるんだって」

「へえ。男？ それとも女？」

「女の子。すごく可愛い子なんだって。あと一学年下」

一学年下の可愛い子、か。ふと八月末に出会った少女の顔が思い浮かぶ。和泉さんだっけ。無事暮らしているかな。また道端で倒れていない事を祈るか。

「ま、どうでもいいや」

「どうでもいいやって。興味ないの？ 可愛い子だよ？」

「噂だ、つてもあるけど違う学年だから、あまり関わりとかなさそうだしね」

「ふん。そうなんだ」

俺が全く興味がないことを示すと、文はよく分からないが、途端に機嫌が上向く。

「何で嬉しそうにしてるんだよ。特に喜ぶような内容じゃなかっただろ」

「分からないなら分からないでいいよ」

「意味がわからん」

女の子はよく分からない生き物です。特に、男子にとっては。

その後、妙に機嫌のいい文と軽く談話しながら、箸を進めた。

「ごちそうさま。食器は俺が片付けておくから、朝の占いのチエ

ツクを頼む」

「え？ うん、わかった。いつも確認してないのに珍しいね」

「今日は何だか、な」

キッチン窓から空模様を見る。雲一つ無い綺麗な青空が広がって、今日も平和に過ごせそう、そんな気がした。

「ちゃんと鍵かけた？」

「かけたよ。それじゃあ行こうか」

「うん」

小鳥の囀りが耳をくすぐる。空気は暑さのためか多少歪んで見えるが、そんなものはこの澄み切った青空が消し去ってくれる。

歩き始めて数分後、俺はふと今朝お願いしたことを思い出し、文に例の結果を教えてもらう事にした。

「それで、占いの結果だけど、どうだった？」

「あ、そういえば伝えてなかったね。えっと、『今日平穩に過ごせるでしょう。但し女の子には要注意』だって

「女難の相が出ているのか。楓辺りに蹴り飛ばされるのか」

「楓ちゃんは優しいから軽く蹴ってくれると思うよ」

「蹴る事は否定しないのな」

はあ、溜息を吐く。案外当たりだったりして。また痣を作るの嫌だぞ。痛いことはなるべく避けたいんだ。

更にしばらく歩く。横断歩道を渡る直前で、運悪く目の前で赤信号に変わってしまった。最近多いな。

「あゝ。捉つかちやったね」

「別に遅刻寸前ってわけじゃないし、いいじゃん」

「そうだね。宗くんは休日以外はとて早起きだから、私助かってるよ」

「いつも迷惑かけてすまないな」

「ううん。そんな、私は勝手にやってるだけだから気にしなくてもいいんだよ？」

「でも奏とかに変なあだ名を付けられてるし」

「通い妻？ 別に気にしてないから大丈夫。むしろ嬉しいし本望かなってやだ何言ってるんだろ私」

俺のことを気遣ってか、文はそんなことを言う。通い妻と呼ばれて嬉しいがるやつはいないだろう。

「あ、今日も置いてある」

軽い自己嫌悪に陥っていると文が不意にそう言葉を漏らした。文の視線の先を見ると、そこには一つの植木鉢が置かれていた。

小さな茶色の植木鉢、そこに咲いていたのは淡い青紫色の花だった。二センチくらいの可愛らしい花。

「アマガ」

「よく知ってるね。花にそんな詳しくたっけ」

「いや、なんとなく。テレビか何かで見たのかも」

「へえ。もっと早く訊けばよかったなあ。ほら、この花可愛いでしょ？ ずっと家で育てたいと思ってたんだ」

尊敬の眼差しで見てる文から目を逸らしつつ、アマガを盗み見る。何故か温かく、懐かしく、それでいて悲しい、そんな感情が胸の中で渦巻く。

「信号、青に変わったよ」

「あ、ああ」

文の呼びかけに俺は意識を現実に戻す。横断歩道を渡り、学校を再び目指した。

後方を再度見る。相変わらず植木鉢が鎮座している。そこに何か大切なものを置き忘れてしまっているような気がした。

担任からの連絡が早く終わり、朝のHRは早く切り上げとなった。終わるや否や、数名のクラスメートが早足で教室を出て行った。多分戸端会議でもするのだろう。よく長時間立って話そうと思うよな。呆れを通り越して尊敬する。

さて、今日の授業は何かな。靴から時間割表を見る。やべ、化学

じゃねえか。公式の証明するの忘れてた。今からでは到底間に合いそうもない。何かいい打開策でもないかと考えていると、突然後ろから背中を叩かれた。

「よ！ 何難しい顔してんだよ」

「……いきなり叩くな。びつくりするじゃねえか」

少し恨めしそうに後ろを向く。そこにいたのは軽薄そうなオーラを持つ、小学生時代の悪友、木原きはら和志かずしだった。

「いきなりやるからこそ意味があるんじゃないか。やるよと宣言してからやって誰が驚くか」

「お前の行動に意味を感じたことは一度たりともないけどな」

「何を言う。この世に意味のない事なんて一つもないんだよ、ワトソン君」

和志がチツチツチと人差し指を突き立て、左右に振る。その指、バキボキに折ってやるうか。

「誰がワトソンだ。それじゃあお前、さっきの理由を言ってみろ」
「暇だから」

「理由になつてねえよ馬鹿野郎。あと語尾に星っぼいの付けるな、キモイ」

コイツの頭を叩き割ってやりたい今日この頃。

「まあ落ち着け。人生色々あるさ。というわけで行くこうぜ」

「意味ありげな事を言われた上に、何の脈絡もなく来いって言われて行くやつがいるか！」

「意味ありげな事を言わなければいいのか」

「一理あると、和志は納得した顔で頷く。」

「どつちにしろ行かねえよ」

朝から何このハイテンション。毎回和志のノリには着いていけないのは、普通であるという証拠なのだろうか。そうだと思いついてみたい。

「ん、その様子だと聞いてないみたいだなあの噂」

「噂？」

「聞きたい？ 聞きたいか。よし言つてやるう」

「転校生が美少女つてことだろ」

「なんだ。知ってるのか」

今さつき思い出した。

「聞いたところ、すごく可愛いらしいな」

「そう！ そうらしいんだよ。これはさ、やっぱり男として絶対確

認しておきたいよな」

「別によくね。いつか見れるだろ」

「おいおいマジかよ。何その興味ないですよ的な態度」

「そんな態度、初めて聞いた」

今朝の文との会話と同様、興味のない風体を貫く。気にならないわけではないが、わざわざ確認しに行くような事ではない。第一、今は化学の授業にする言い訳を考えなくてはいけない。こちらの不注意を認めつつ、いかに罰を軽減できるか、そこに重点が置かれる。あの教師は一筋縄ではいかないからな。何とかいい案を思いつかないと。

俺のその対応がいけなかったのかもしれない。にやりと和志は笑うと、「一つ質問しよう。お前は男か？ 女か？」と訊いてきた。

何当たり前の事を訊いているのか疑問に思ったが、素直に男だと答える。計画通りとさらににやりと顔を歪ませる。どこの悪人だよお前。

「よし、なら興味あるという事になるよな。そうなるよな」

「ならねえよ」

「全く、お前も男だな。宿命には逆らえぬか」

「ぶっ飛んだ宿命だな」

「さて、テンションも上がってきたところで行くぞ！」

「は？ テンション上がったつて、ちょ、何故手を持つ」

「いいいいいいやふうふうふうふううううう！」

「ちよと待て。お前今日は一段とおかしい……………って放せ、引き千切れる！ 文！ 助けてくれ！」

俺の叫びは虚しく教室に響き、引き摺られるようにして教室を後にした。この時は思いもなかった。まさかこんな形で和泉宙と再開するなんて。

「ゼー、ゼー、ゼー」

「着いたか。お、ターゲットの所在を確認。現在クラスメートと談笑中」

和志に連れられ辿り着いた場所は一年生の教室前だった。和志は空想上のトランシーバーに何やら戯けた事を吹き込んでいる。とうとう脳の回路がいかれたのかと、俺は嘆息した。辺りを見る。廊下を行き交う人々は全員一年生。当然といえば当然だ。この空間の異分子である俺たちは奇異の視線が注がれる。正直ここには居づらい。「ほら見てみるよ。すつごく可愛いぞ」

和志はほらほらと非常に興奮した様子で、例の女子を見るように促してくる。

「わかった。わかったからそこまで慌て、る、な」

和志が指差す方を見て、俺は言葉を失った。教室の一番後ろの、手前から四番目の席。そのクラスに在籍しているのであるう女子たちが周りを囲み、座っている子に矢継ぎ早に話しかけている。座っている子が人垣の隙間から見える。そこに居たのは、

「な？ どうよ宗一」

和泉宙だった。あの艶やかな黒い髪と、オレンジのリボン、可憐なその横顔を見間違えるはずがない。桃色の頬、明るい笑顔は以前は見れなかったもの。良かった。体調は無事、改善したらしい。

「おい、どうした。あまりにも可愛いから見惚れちまったか」
和志の軽口を無視する。脳の処理が追いつかない。一人の少女を救えた事による安堵？ それとも運命的とも言える再開に感動している？ 違う。恐らく違う。どう言葉で表現していいのかわからない。きっと、多分。

何かが起こる前触れ、それを直感的に察知しているのだろう。

ふいに、何かに気付いたかのように和泉がこちらを向いた。視線と視線がぶつかる。目が合った。相手は目を丸くし、俺と同様硬直した。やはり、彼女は和泉宙なのだ。彼女の反応からそう断言できた。数瞬の後、和泉が席を立ち、こちらに駆けてくる。和泉の表情は先程の俺とは違い、再会を感動しているようなものだった。ただ、ちよつと顔が強張っているのは何故だ？

俺の前に辿り着き、和泉は上目遣いで俺を見る。期待と不安が入り混じった目。緊張した面持ちで、

「神崎、宗一先輩、ですか？」

と言った。

「そ、そうだけど」

どもりつつも返答する。和泉の顔が晴れ晴れと輝く。不安という要素が瞳から抜け、期待が歓喜へと変わっていく。

そして。

「先輩、会いたかったです！」

次の瞬間、俺は和泉に思いっきり抱きしめられた。ぎゅっと、二度と離さないとばかりに。

9月16日(1) (後書き)

意見・指摘・感想などがありましたら感想の方まで宜しく願います。

皆さんに笑いと感動を届けられますように。

では(・・)ノシ

奏「今回は私の登場だね」

宗「ついにトラブルメーカーが来た」

奏「なにおう！ トラブルじゃなくて、私が作り出すのは笑いと騒動！ その違い、お分かりかな？」

宗「それがトラブルだって言ってるんだよ。文を見習え」

文「え、私!？」

奏「文「うちも奥手だからね。宙ちゃんに抜かれないよう、今からアタックアタック!」

文「あ、アタック? こう?」

宗「ぐふっ!」

奏「・・・誰もタックルがませとは言っていないよ?」

和「俺、完全に忘れられてる?」

(2) (前書き)

予約投稿です。

俺の思考は完全に停止していた。何で和泉が俺に抱きついているんだ？　そこまで喜ぶ事なのか。いや喜んでいたとしてもこのような行為は普通しないだろう。胸周辺に感じる温もりは、俺の胸の鼓動を一層早くする。

「おい、宗一。お前ら知り合いだったのか？　随分熱烈な歓迎を受けているじゃないか」

「俺も正直驚きすぎてよく分からない」

「だろうな。とりあえずリア充潰す」

訝しげな目で見る和志と面白いものでも見つけたかのような目をする周辺の人々。注がれる視線の痛さは、正に質量を持っているのではないかと疑わずにはいられないほどだった。

しかし、そんなものが可愛く思える、恐るべき事態が発生していた。

「そ、宗くん？」

それは文が来ていたという事だった。今思えば、和志に教室から連れ出される際に文へ助けを求めていた記憶がある。だからここに来ているのだろう。何にしろ、絶体絶命の危機であることに変わりはない。

「な、なんで宗くんに、女の子が、抱きついてるの？」

「えー、いや、そのな」

「後ろめたい事があるときの反応！　もしかしてその子と、こ、こ、恋仲に!？」

今にも精神が崩壊しそうな様子で、文が奇妙なことを口走る。

「別に恋仲でも何でもないからな」

「はい！　命の恩人なんです」

とりあえず否定しておき、文を下手に刺激しないような答えを模索していると、俺の発言に乗っかるように和泉がそう発言する。和

泉はようやく俺から離れると目を輝かせて文に詰め寄った。

「神崎先輩は凄いです！先月私が暑さでふらふらになっていて、危うくトラックに撥ねられそうになったんですよ。その時颯爽と現れ危機一髪で救ってくれて。しかも私の体調を気にして公園に運んで、更に貴重な水分まで頂いて、もうなんてお礼を申し上げたらよいか！神崎先輩はヒーローです！」

「え、あ、そ、そうなんだ。宗くんが人助け。うん、さすが宗くんだね！」

熱弁を振るう和泉に文は目を白黒させていたが、話の内容を理解したのか、和泉と同様に目をキラキラさせ、尊敬するだの、英雄だの戯けた事を言っている。

「なるほど。だったら抱きついてても仕方がないね」と考えているに違いない。落ち着けば分かるとは思うが、助けて貰った事と抱きつく事になんら因果関係はない。気付かないだろうが。

「宗一よ。なんつーか、よく分かんがナイスだ」

「和志。よく分からないのにナイスと言うな。俺は今後の学園生活がどうなるか不安なんだ」

「バラ色だろ？」

「赤である事は否定しないよ」

本当に不安で仕方がない。

転校生は美少女で、その子が見知らぬ上級生に抱きついたところを目撃したとして、果たして何人の男子が不愉快に感じるだろう。不特定多数の一年生男子から良くて不愉快そうな視線、悪くて敵意を向けられる。それだけでも気分が悪くなるというのに、後にやってくるだろう時間の浪費や物品の損失を考えると正直頭が痛くなってくる。

今後について頭を悩ませていると、廊下に予鈴の音が鳴り響いた。もはや条件反射に次々と各々の教室へ戻っていく。

「授業が始まりそうだな。桜木、宗一。早いところ戻ろうぜ」

「ほんと、もうそんな時間？」

「では、先輩方に迷惑をお掛けするわけにもいきませんし、私はこれで。神崎先輩、また会いましょうね！」

教室内へ駆けて戻る和泉の背中を見送り、三人で2 - Bへと向かった。

(2) (後書き)

次回投稿する内容がかなり長いので、今回はこれだけアップしました。

なかなか楓を登場させられない。

9月18日の話からようやく出るので、アップは数週間後になります。

メインキャラなのに何故こつも遅いのか。

楓さん、すみません。

意見・指摘などがありましたら感想欄の方まで

では(・・・)ノシ

楓「早く出しなさいよ。いつまでスタンバイしていればいいのよ」
宗「慌てるなって。お前が活躍するシーン、たくさんあるから」
奏「そうそう！ それにメールは自分のルートがあっという間にいいじゃん。

私は除け者ですよ。めそめそ」

文「奏ちゃん……………」

宙「先輩……………」

奏「メインヒロインたちが私を生暖かい目で見てくる。なにこれ新感覚」

宗「大丈夫だ。作者がやる気を出せば奏 を書いてくれるさ」

奏「頑張ってください！ お願いしやっす！」

宗「作者は

『作ってもいいけど、その代わり奏は幽霊という設定を加えなきゃいけない』

つてさ」

奏「それでもいいのでどうか！」

宙「必死ですね」

(3) (前書き)

連続投稿です。

結構疲れるものですね。

では本編をどうぞ。

俺と和泉の出会いには話題性の溢れるものである事は誰も否定はしまい。当然の如く、校内にこの話は浸透し、一時の少年少女の肴となるだろう。仕方がないと言えば仕方がないのかもしれない。

その事が憂鬱であるのは言うまでもないが、俺には更に一つ、懸念事項があった。

みさこの
かなで
笹野 奏。

台風少女のことだ。

あいつがこれを見逃すはずがない。

「宗やん、宗やん。聞いたよー。かわいーい女の子を助けたんだって?」

ほら、予想見事的中。全く嬉しくない。奏はくるくると踊りながら俺の机の前にまで辿り着くと「ぐっじょぶ」と親指を突きたてた。ウェーブのかかったふわふわとした茶髪、青いリボンで結われた短めのツーサイドアップの端がまるで本人の活発さを表したかのようにひよこひよこ跳ねる。奏はムードメーカー兼トラブルメーカー。場を盛り上げてくれるのはいいが、たまに犠牲者を出すのが玉に傷だ。俺や文と関わる事が多く、隣のクラスであるにも関わらずしょっちゅう出没する。おかげで俺、和志、奏は三バカとして人括りにされる事が多くなった。大変不名誉である。

「ん、まあ、そうなるな」

今回ばかりは騒ぎ立ててもらいたくないので、素っ気無い返事という対処を取る。不満なのか、奏は顔を近づけ、更に追求してくる。「はつきり言いなさいよ、宗やん。てゆーか、自信持ちなさいよ。変な男に追い掛け回される女の子。交差点に追い詰められてもう駄目だと思ったその時！ 颯爽と現れ追跡者を古流武術で叩きのめし、腰の抜けた少女に優しく手を差し伸べて、『大丈夫だったか?』と

甘い声で語りかける。キヤーツ！ さっすが宗やん。カッチョイー！

「虚構九割の報告をありがとう」

誰が使うか、古流武術なんて。あと顔が近い。

「えー？ 違うの？ 宗やんならそれくらい軽くやっちゃいそう
なイメージがあるんだけど」

そんなイメージは今すぐ捨てる。

「その後大人な対応で少女を慰めてあげて、よく分からないけど
水を飲ませてベンチに寝かせてあげたんだよね？」

「後半は合ってるな」

「むむむ。謎は深まるばかりですな」

バツと身を引き、こめかみを人差し指で両側から押さえ思案する
奏。ビビビと口走る辺り、変な電波でも受信しているのではないかと
心配になる。

「ピコーン。そうだ！ 宗やん。放課後にその女の子と、文つち、
変態、メープルを『グリーンウッド』に呼んで詳しい話を聞かせて
貰っていい？」

どうやら変な電波をもの見事にキャッチしてしまったらしい。
アンテナを折ってやるうか。

「断る。誰が話すか」

「ある事ない事言いふらされるよりは、真実を事細かに伝えた方
が身のためだと思うよ」

世間一般で言うところの脅迫を行使され口をつむるしかなくなる。
脅迫は犯罪です。

というか、おいしい話題に盛り上がるのは仕方がないが、もう少し
本人たちの気持ちを酌んで欲しい。しばらくの間学校に通うのが
辛くなってしまうじゃないか。

人の噂も七十五日。この慣用句の示す通りだと二カ月半。周りの
生徒から珍獣扱いされると思うと、心が鉛のように重たくなる。も
し和泉と恋仲であるといった誤解が広まったら、他でもない和泉自

身に迷惑が掛かってしまう。早く噂が消えるようにと、俺は知らず知らずの内にそう願うようになる事だろう。鬱になりそうだ。

「あれ？　そこまで触れられなくなかったんだ」

「これからどう生きていけばいいのか不安になった」

「まじで深刻になってるよ。奏、とても驚いておりますぞい」

驚いているのは見て分かる。反応がいちいち大きいし。しかも、「ぞい」ってなんだ。そんな特徴的な語尾、初めて聞いたぞ。俺の周辺にいる人物はよく分からないやつが多い。

またもや受信中ポーズを取る奏に、今度こそ変な電波を受け取らないように祈る。

「ピピピツ。来たよ来たよ！　私の今出せる限りの知能とか汗とか色んなものの結晶が出たよ！」

添付ファイル、色んなものの結晶。次は未知なる物質を手に入れたようだ。怪しいから早く捨てた方がいいと思う。

「噂を恐れるなら、本当のことを流せばいいですよ」

「は？」

「だ・か・ら・さ。宗さんは噂に尾ひれが付いて変な風に話が拗れるのが嫌なわけでしょ？　そしたらあえて本当のことを話して回れば、それ以上尾ひれの付きようがないし、誤解を招く心配もない！　これ、奏的には当たりだと思っただけど、どうかな」

奏の言葉に思わず俺は嘆息した。その行為そのものが誤解を誘発する原因になるかもしれないと言うのに、火に油を注ぐような真似をしないで欲しい。それに噂ってものは本人が何しようが無関係だ。奏は尾ひれが付くのを避けると言ったが、こればかりはどうしても避けられない事だ。そもそも真実であるか、信憑性のあるかなんて他の人にとってはどうでもいい。話題性、娯楽性、異常性の内一つでも満たしていれば肴としては上等だ。そういうものを人々は求める。噂の根幹は人々の興味、これが消滅しない限り噂はいつまでも生き続ける。だから余計な事をしない方が身のためなのだ。

この事を簡潔に奏に伝えると、ちえー、とつまらないと声を上げ

る。こいつは娯楽性を求める側か。

「分かったよ。真実は私の胸の内に隠しておくね」

「俺が話す前提かよ」

「話してくれないの!？」

「何で意外そうな声」

「はつ。まさかやましい事でもあつたんじゃない?」

「それが尾ひれとなつて俺を苦しめるんだよ」

「いつそ苦しんじゃえ」

「やめる。明るく言つな。明るく言えば何でもいいと思つてるのか」

「信じてます」

「疑えよ」

疑えよつてツッコミもおかしいけどな。

「疑えよつて変じゃない?」

「俺もそう思つたところだよ」

指摘されると案外落ち込むものだな。ツッコミ返し。なかなか成立しないぞ。

「私たち、心が通じ合つてるのかも!」

「今すぐ切断してやるから待つてろ」

「絆は時に儂いものである」

儂く散ればいいのに。

「つてわけで『グリーンウッド』にみんな集めるから、詳しいこと、何も出なくなるまで吐いちゃつて」

「絶対に喋らない」

「でも助けてもらった子は喜んで話すんじゃないの?」

確かに和泉なら先程文に語つたときと同じように恍惚とした表情で熱弁を振るうに違いない。八方塞だった。どうにかして口止め出来ないものだろうか。

「ではでは、そーゆーことで。ほんじゃらば!」

謎の言葉を残し去つていく奏。集会は決定事項となつてしまった。

あいつの事だから一分も経たないうちに和泉へ伝えてしまふ。近くにいる和志と文に会話の内容は丸聞こえだっただろうし。奏はそこまで計算していたのか？ だとしたら驚きだ。

この一日で色々失ってしまいそうな気がする。微妙な喪失感が身を蝕み、精神的疲労が重圧となって圧しかかる。誰か、俺を解き放つてくれ。

「宗くん……」

「宗一、お気の毒に」

あまりにも疲弊しきっている様子の俺に、文と和志はしばらく声をかけられなかったと後に語った。

(3) (後書き)

この小説、午前一時に書いています。

すなわち妙にテンションの高い状態で書いているわけですよ。

なのでよく分からないノリがあつたりしますが、

温かく、広い気持ちで受け入れてもらえたら幸いです。

意見・指摘などがありましたら感想欄の方まで

では(・・・)ノシ

宗「9月16日の話が異常に長いな」

文「宙ちゃんが登場話だからしょうがないと思う」

宙「作者の力不足(ぼそっ)」

奏「宙つちがえぐいよ!」

宙「毒舌キャラで押していこうかな」

宗「押すな押すな」

宙「先輩が言うなら…….……きゃっ」

文「宗くんがいつか取られるかも」

奏「ここは攻め時ですぞ、文つち」

和「最近力オスになつてきたよな」

楓「意味が分からない会話するわよね、あんたら」

(4) (前書き)

旅行に行っていて投稿できませんでした。
放置していてすみません。
では本編を。

「へえ、なるほど。そういうことだったんだあ」

「なんつーか、宗一。お手柄だな」

放課後、俺、文、和志、奏、そして和泉の五人は学校の近くにある喫茶店『グリーンウッド』に足を運んでいた。楓は委員会の活動で出席は出来ないと伝えられた。

店内に入り席につくと、好奇心に満ち溢れた様子の奏が「さあ、包み隠さず、全て話してもらおうよ！ この笹野奏の前でね！」と立ち上がり、人差し指を和泉に向け、比較的大きな声でそう投げつけた。開口一番何を言ってるんだ。とりあえず文と二人で周りの迷惑になるからと口を塞いでおいた。俺は奏の腕を、文が口を押さえたのだが、どうやら我が幼馴染は鼻まで塞いだらしく、酸素不足で奏の意識は数分間、遠い国へ飛んでいた。激怒されたのは伝えるまでもないが、その際に「三途の川で水遊びしちゃったじゃん！」と口を尖らせ言い放たれた。向こうで楽しんできたのか。奏らしいというか、アホというか。

結局和泉に全て話してもらい、あの日の出来事は詳細に皆へ伝わった。文は途中で「前に言ってたよね」と以前俺が話した内容を思い出した、と密かに知らせてきた。和泉が熱く語っている最中だからこそその行動だろう。そうだと返すと、文が和泉を複雑な表情で見つめる。

「うん、うん。さすが宗くん、尊敬するよ」

「はい、先輩は尊ぶべき人です」

で、何故直前まで嫌な面持ちでいたかという俺の考えに反するからだ。助けた人から感謝されるのはとても嬉しい。でも第三者からヒーローだとか、英雄だとか、そういう目で見られたくない。ただ助けようと思ったから助けただけ、そうしたいからそうしただけ。ただそれだけだから。まあ、実際ヒーローと言われたら照れてしま

うけど。

「尊ぶって、大げさだな」

「大丈夫です、先輩。先輩は誇ってもいいんですからね」

「何が大丈夫なのやら」

「宗やんは凄く謙虚というか、人前に出たがらないよね」

「目立つことはしたくないな」

「でも私が目立たせてるから、宗やん人気者になってるよ」

「目立ってるな」

三バカの異名は伊達ではない。その知名度は我が学年全体に伝わっており、他学年にも多くはないが俺らの存在を知っている者がいるという。

けれども、俺自身はっちゃけた事をやった記憶はない。

三バカと呼ばれる所以は恐らく和志の暴走を俺が止めるパターン、奏の暴走を俺が止めようとし結果巻き込まれるパターンがあまりにも多発しているからだろう。楓が止めてくれる事も多々あるのだが、和志のときは完膚なきまでに撃墜させ、奏のときはほとんど事態を收拾させる。一方俺が注意やツツコミを入れると問答無用で引きずり込まれる。至って真面目にやめると、静かにするよう促しても益々その場を盛り上げる、騒ぎ立てる。だから一緒にバカ騒ぎをしていると見られるのだろう。今後の関係を見直そうかな。

このようにして俺が和志と奏を繋げている相関図となり、故に三バカのまとめ役というこれまた不名誉な称号を手にしてしまっていると気付いたのは高校に入って間もなくだった。

「そういえば、和泉は今学期から転入してきたんだよな」

「宙ウツって呼んで下さい。ええ、八月の下旬にこの街に引っ越してきて、ちよつと部屋の整理などに手間取ってしまいました遅れてしまったんです。転入の準備も含めて先週終わったばかりで。初登校したのは昨日です」

だとしても中途半端な時に入ってきたな。何か家であったのだから。勿論変な詮索はしない。俺自身、そういうのは嫌いだし。

「昨日は勤労感謝の日じゃなかったか？」

「丁度模試があつたんです。こちらへの転入すると話を伝えたときに受けるかどうか訊かれまして」

それを聞くと奏が話しに加わってきた。

「で、受けたんだ。つまりのつまり、宙つちの初登校は模試だったんだよね」

「そうだな。大丈夫だったか？」

「え、宙つち？ あ、はい、順調に終えました」

奏に宙つちと呼ばれ困惑した様子だったが、それを軽く流し俺への返答を済ませた。

「宙つち、もしかして、実は頭いい系？ わあ、いいなあ。私なんて全然でさ」

「あの、宙つちとは？」

「宙つちは宙つちだよ。あだ名だよ」

宙の様相が困惑から混乱へ移る。初対面の人にいきなり積極的に話されるだけでなく、あだ名を付けられるなんて経験が今までなかったからだろう。当然ではある。

「できれば宙つちではなく、宙か和泉と呼んでほしいのですが」

「宙つち」

「あの」

「宙つち」

「えと」

「宙つち」

「………はい」

「よろしい！」

えっへんと無い胸を張る奏。うな垂れる宙。彼女もやはり奏の猛攻には勝てなかったか。いい奮闘振りだったのだけれど残念だ。

奏は一度付けたあだ名は変更しない上にずっと呼び続ける。よくよく思い出せば俺も中一の頃は宗やん、宗やん呼ばれるのを嫌がっていた。その所為で周りでも数名その名で呼んでくるのもいたし。

慣れって怖い。

あだ名の命名の成功にご満悦な奏は、前は何処に住んでたの？

とか、好きな歌は？ とか、スリーサイズは？ とか、様々な質問を矢継ぎ早にぶつけていった。宙は宙で、教えてもいい範疇の事柄だけを教えていった。スリーサイズなんて言う筈がないだろ。つーか、そんな質問をするんじゃないよ、奏。

俺、和志、文は二人の問答を聞きつつ、グリーンウッド特製のモンブランを食べ進める。木の枝に見立てた、アーモンドの欠片がふんだんにあしらわれた細長いチョコレートが二本刺してあるのが特徴で、甘さ控えめのモンブランペーストと、ほろ苦いチョコ、香り豊かなアーモンドが一体となり、素晴らしい調和を見せている。これがまたコーヒーとよく合う。飲み物は各々違うが全員同じケーキを頼んでいるため、勿論の事、奏と宙の前にもモンブランが渡っている。だが宙の話や世間話に花を咲かせているので少しも手をつけていない。せつかくの熱い紅茶も冷め切ってしまったているだろう。モンブランを半分以上食べたところで誰かが俺の右膝をピンポイントで蹴ってきた。鈍く、ひたすら加圧されるような痛みに思わず顔をしかめる。一体誰がやったんだ。

真つ先にとある人物に疑いの目を向けた。奏は宙と話しているため、こちらにちよっかいを掛けてくる理由が全くない。あいつがやるとしたら暇な時だ。宙と文は人を蹴る真似はしないだろうから、必然的に一人に絞り込める。

「なあ、和志」

「なあ、宗一。俺らここにいる必要がある？」

「訊く前にまず俺を蹴った事を謝れ」

「すまかった。次からは優しく蹴る」

「蹴るな」

「で、どうするよ。質問したい事もほとんど奏が訊いてくれたし、ケーキ食い終わったら解散する？」

その言葉に宙と歓談していた奏がぴくりと反応した。くふふと怪

しげな笑みを浮かべ奏がチツチツと指を振る。

「ノンノン。駄目だよ変態」

「誰が変態だ!」

憤慨する和志を横目に奏は、「この後は仲間となった宙っちと一緒にカラオケパーティーするのですよ。おっけー?」と、急遽親睦パーティーを立案した。

「な、なかま?」

「そう! 今日はずっちが仲間となったお祝いに、夜通しで盛り上がるよ。ね!」

「せ、先輩!」

「後輩よ!」

その粋な計らいに宙は感涙し、奏とがっしり抱き締め合う。周りの視線が一気に集まる。凄く恥ずかしい。

「でも、私なんかのためにそこまで」

「私なんかって言わないの。あ、もしかしてパジャマパーティーの方が良かった?」

「いえ、その」

「その前に、制服のままカラオケに行ったら停学になるぞ」

「あー。じゃ、男子は諦めて女子だけでやっちゃう?」

「男子をはぶるな」

「やだなーカズ。狼をウサギ小屋の中に入れるような真似はできないよ。花も恥らう乙女の花園に」

「カズって何だよ」

「カスだなんて、自分のことを過小評価しない!」

「してねえよ。つーか、バカにしたいだけだろ」

心外だとばかりに和志が苛立たしげに漏らした。

「違う違う。あだ名が変態で、カズが敬称、カスが蔑称だよ。なので今私は馬鹿にしたわけです」

「わけです、じゃない! なんだよ。あだ名が変態って。わけがわからねえよ」

頭を抱えうずくまる和志。さすがにかわいそうなので俺は奏にやめるよう、自重しろという意味を含ませた視線を送る。目が合う。

「ドキッ」

「.....」

ときめかれてしまった。そして流された。

奏の予想外の反応に戸惑いを隠せずにいると、文は「あ、あのね」と言い辛そうにそう切り出した。

「私、この後買い物に行かなきゃいけないから、パーティーには出られないの.....」

「それじゃあ仕方がないね。パーティーはまた後日にしようか。ただいま三時四十七分。まだ時間があるからもったいないけど解散しようか」

文の発言に奏は残念そうに伝える。がすぐに心を持ち直すと奏が解散するか確認を取る。それに各々賛成の意思を見せると、俺と文、宙がほぼ同じタイミングで立ち上がる。ケーキはどうするのかと思っただが、宙はいつの間にか食べ終わっていたらしい。食べるの早いんだな。

「先輩方。今日はありがとうございました。交流を持って嬉しいです」

「なら良かった。同級生と帰リたかつたんじゃないかと思ってさ」

「いえ、神崎先輩と話せるのなら、例えタイでも、宇宙でも行きます」

「そんなところにわざわざ行って話そうとはしないから」

非常にずれた宙の発言に困惑する。宙のキャラがだんだん固まってきた。これが素なのかどうかは、まだ日が浅いため分からないが、もしそうだとしたら少し嬉しい。

「では、明日から全力全開で行かせてもらいますね」

「全力全開？ 何に」

いきなり意味不明な宣言をした宙に、文が俺の疑問を代弁するかのように訊く。当然とばかりに宙は言う。

「もちろん、恋に、です」

「こい？」

「はい。私に春が、ついに訪れたのです」

「どゆこと？」

奏が珍しく持て余している。他方で和志は興味深そうに、文は急な展開に付いていけず目を白黒させていた。俺はモンブランを優雅に味わいながら宙の声に注意する。

「詳しい事は秘密です。というわけで」

どこで一旦区切り宙が俺を見る。

「覚悟してくださいね、神埼先輩」

コーヒの程よい苦味がコーヒ一杯に広がる。それと同様に宙の言葉が脳全体に染み渡る。どうやら俺の平穩をしばらく何処かに置いていかなければならぬらしい。奏が何故か慌てている。和志がひゅーっ、と口笛を吹く。文が完全に固まっている。

俺と宙の視線が絡み合い、その綺麗な漆黒の瞳に吸い込まれる感覚がした。潤んだ瞳に映る自分の顔。果たして彼女にはどのような見えているのだろうか。学園の先輩なのか、ヒーローなのか、それ以外なのか。

九月十六日。

人知れず紡がれた恋の前奏曲は雲の微かにかかる空へと消えていった。

(4) (後書き)

意見、指摘などがありましたら感想欄まで。
では(・・)ノシ

宙「片鱗を見せてしまった」

文「ライバルが現れてしまった」

奏「宗やんがハーレムの道を歩み始めてしまった」

宗「三人とも何を言ってるんだ。特に奏。ハーレムって何だよ」

和「確かにハーレムになりそうだよ。リア充め」

奏「大丈夫だよ。ハーレムENDは作者が好きではないから、

最終的には一人になるって」

楓「宗一。骨は拾ってあげるから」

宗「不吉な事言っ立去るんじゃないやねえよ。怖いから」

9月17日(1) (前書き)

予約投稿です。

一足早くあの人物を登場させました。
では本編を。

9月17日(1)

和泉宙との衝撃的な再会から翌日、一人雨季特有の蒸し暑さを全身で感じ、まだ人通りの少ない通学路を歩きながら静かな朝をしみじみと味わっていた。暦の上では既に秋に入っているのだが、実際の気候は夏のそれ。猛暑と大雨を繰り返す気まぐれな天候には正直慣れざるを得なかった。秋の香り、景色を楽しむのもう少し先の話になりそうだ。

文は本日日直の当番なので先に家を出ている。ちゃんと朝ごはんを用意してくれ、心から感謝を籠めて「いただきます」と言い全てを綺麗に食べきった。

道の所々に植えられている木々を見る。まだ緑の葉をつけてはいるが、あと一ヶ月かそこらで赤や黄色に染まり、そして散っていくのだろう。感慨に耽りながら歩く事がこんなにも心を穏やかにさせるなんて。一人つきりでこうするのも悪くはないのかもしれない、と思わず微笑んだ。

「……………宗一。朝から機嫌が良さそうね」

不意に聞こえた女の子の声。クラス内で聞くよく通る声は一人の人物を特定するのに難しくはなかった。

「楓。久しぶりだな」

谷山 たにやま 楓 かえで。2 - BのHR委員長で成績はいつも学年十五位以内。

態度良好で、まさに優等生という言葉に相応しい子だ。たださらりと酷い言葉を投げつけたり、俺に対してすぐに殴ったり蹴ったりしてくるところが玉に瑕だ。何故俺にだけ暴力的なのかは原因不明。駆け足でやってきて俺に追いついた楓の顔は何やら呆れた顔だ。呆れられるような事を言った記憶がないので少し不安になる。

「久しぶり、って。昨日教室で顔を合わせたじゃない」

「いや、言葉を交わしたのは久しぶりじゃん」

「挨拶したでしょ？」

「お前の挨拶は顔面パンチか」

「そ、それは。あんたがスカートの中見ようとしたからでしょ！」

「人聞きの悪い事言うな！ 風でたまたま捲り上がったただけだろ」

「凝視してたじゃない」

「凝視してないし、別にパンツ見えてないからいいじゃん」

「どこまで見たのよ変態！」

「ふとももまで」

「言うな！」

左足を半歩前に踏み出し、右足で思いっきりローキックをかます楓。クラスの鑑がこれである。どこまで見たのか訊かれたから答えたまで。俺は悪くない、はず。

「痛い！ 痛いつて谷山さん！ 何でそんな細くて白い足から鈍い音が鳴るくらい重い一撃が繰り出せるのか不思議でたまりません！」

「愛と勇気と憎しみがあれば出来るわ」

「最初はいええないし、二つ目は別にいらぬ。ぶっちゃけ最後のだけでいいよな！」

「勇気は必要よ。相手を殺す勇気……」

「そんな勇気は捨てちまえ！」

でないところちの身が持たない。本当、何で俺には暴力を働くの？ 全く原因が掴めず首を傾げるしかない。

「楓、早く教室に行かなきゃいけないんじゃないか？ 今日中は

津、休みだろ」

「あの老いぼれが休みってことは知ってるわ。職員室に至急向かうつもりよ」

老いぼれと言うなよ、担任に向かって。結構美人なのに口と足癖が悪いから台無しだ。

「それじゃあ私は先急ぐから。くれぐれも遅刻なんてしないように」

「この時間だぜ？ 逆にする方が難しいって」

「OK。また後で」

楓が駆け出すと、二房のさらさらとした茶髪が流星のように後ろに尾を引き流れていく。真珠のように白い足が大地を蹴り、学び舎へと駆けていく。その様は天空を雄大に羽ばたく鷲のよう。

「さて、俺もゆっくり行きますか」

自分のペースで焦らず、遅すぎず、午前八時の通学路を歩行する。この今の俺にとってあたりまえな行動がいつまで続くのか。卒業と共に消えるこの習慣をじっくりと楽しむとしよう。

「あ、宗くん、おはよう。ご飯どうだった？」

教室に入り、まず一番に聞こえた声は文のものだった。既に黒板は綺麗にされており、少しの消し残しもない。相変わらず仕事が丁寧で早い。

「おはよう。とてもおいしかったよ。ありがとっな」

「ううん。おいしいって言ってもらえるだけで幸せだから……」

文は頬を赤らめ、もじもじする。可愛らしい仕草に心臓が大きく拍動した。上目遣いは反則だ。そんな風に挨拶を交わしていると台風少女もとい奏が乱入してきた。

「なあに言ってるの？ これだけで幸せとかさ。もっと先を求めなきゃ、文っち」

にやにやしながら奏が文に抱きつく。「おはようさん！」と形だけの挨拶をし、文の腰辺りを頬擦りしている。文が相当困ってるぞ。頬擦りをびたりとやめると、文から離れ俺に何か言いたそうな顔を向けた。

「そ・れ・に、宗やん。なにあの機械的な返し方。もっと情熱的に、その思いの丈を伝えなきゃいかんでしょ。『君の作るご飯は最高においしいよ。だがいつかは君を食べたいな』とか言っちゃってもいいんじゃない？ むしろ言え」

「言うかバカ！」

「何かイライラしてるね。もしかして倦怠期ってやつ？」

「結婚すらしてないのに倦怠期も何もあるか！」

「ほお、いつかはするのですね。ぐっじょぶ」

文つちの将来は安泰だね。子供は何人？ 三人？ とどち狂った発言をするので、でこピンをかまし静かにさせた。文はどうしたのか、顔を真っ赤にしている。何を想像しているのやら。

「んで、また暇つぶしにからかいに来たのか？」

「あゝ、それでもいいけど」

「よくない」

「ちよつと宗やんに伝えることがあつてね」

その言葉を聞くと文は席を外すねと、教室を出て行った。気を遣わなくてもいいのに。

「伝える事って何だ」

「うん。ナギが今日の放課後、『憩いの森』でティーパーティーやるから宗やんにも参加して欲しいって」

「ナギ……三條みじょうのことか。別に構わないけど。何故俺を？」

「たぶん一番身近な男子だからじゃないかな。いいねえ、モテる男は」

私は一切浮ついた話がないから。奏は珍しく悲しそうな顔で落ち込む。そりゃ、こんだけ騒いでいれば近づいてこないだろ。

「失礼なこと考えなかつた？ というかムカつくこと考えなかつた？」

「考えてない、考えてない」

「ふーん。まあいいか。宗やんだから許す！」

「いちいち大声で言うな」

周りから視線が集まる。みんな奏の起こす出来事に慣れてきたとはいえ、やはり目立つのは避けられない。なるべく早く用件を済ませるため先を促す。

「参加する。だからさっさと戻れ。HR始まるぞ」

「わ！ほんとだ。てなわけで、いいよね？ 了承って伝えておくよ？」

「いや、俺から言っておく。同じクラスなわけだし」

「そーいえばそーだね。私が違うクラスってこと忘れてたよ」

奏はやっちまったぜと親指を突き立てる。俺もついさっきまで忘れてたよ。奏はもうこのクラスに馴染んだというか違和感がないというか。

「じゃ、アデュー」

手を振りドアの向こう側に奏が去っていく。入れ替わりに文と楓、そして中津が入ってきた。

「席に着きなさい。HR始めるわよ」

楓の声に反応し教室中に散らばっていた人が自分の席に戻っている。俺も同様に席に着いた。今日は楓が前に出ている。もしかして学園祭についての知らせがあるのかもしれない。内容は恐らく「出し物を決める」だろうな。

『学園祭』

年に一度の大掛かりなイベント。中学校と高等学校が同じ敷地内にあり、且つ資金がかなりあるので規模も自然と大きくなる。出店は勿論、お化け屋敷や喫茶店、映画館、劇場、部活内対抗戦、バンド、様々な催し物が二日間の中で開かれ、その密度は周りの学校より遥かに濃い。

多いのは催し物だけではない。学園の生徒、保護者並びに学園関係者、近隣の人々が学園祭期間、溢れんばかりに来る。

さらに、この学園祭には若い男女の好みそうな噂が流れているのだ。それは、

この学園祭で告白すると必ず成功する。

9月17日(1) (後書き)

現在 surteinn は PC の使用できる環境化にいません。
さらば PC、カモン勉強漬けライフ(泣)

なので更新はしばらくの間予約投稿での形になります。

八月中にどれだけ書き上げられるかで変わりますが、

大体一ヶ月に一話ペースになりそうです。

たまに連続して投稿するぐらいですかね。

九月から十二月まで感想や意見に対して返事を書けなくなりますが、
どうかご了承ください。

これまで通り感想・意見を待ってます。

どしどし感想欄の方まで送ってください！

では(・・)ノシ

宗「作者、小説を放置する」

楓「仕方がないんじゃない？」

文「仕方が、ないよね」

奏「友人から無理やり借りてでも投稿すべし」

宙「無理矢理借りるって……. それって強奪では？」

奏「気にしない気にしない」

渚「次回は私が登場します」

(2) (前書き)

予約投稿です。

午後三時二十五分。学校から十五分くらいの場所に『憩いの森』はある。山上学園の生徒のみならず、近くに住んでいる家族やカッブルも結構な割合で足を運ぶ、まさに憩いの場所だ。広大な面積を誇り、サッカーグラウンド三分と同じくらいの面積がある。現在軽く歩いただけでも大多数の家族連れが窺えた。

小さな子供たちと、一緒に遊ぶか遠くから子供の戯れを眺めるその親たち。仲良く手をつなぐカッブル。誰もが輝かんばかりに笑顔を振り撒き、そこには悲しみ、辛さといった曇りを一切感じられない。一点の曇りもない透き通った青空は彼らのそんな様子を表しているかのようだ。

さて、待ち合わせの公園入り口まで来たのはいいものの、たった今思い出したのだが詳しい待ち合わせ場所を訊くの忘れていたため、何処に行けばいいのか分からずにいた。この通りだった広い緑の公園だ。奏たちが何処にいるのか見当がつかずにいた。まあ、立ち止まっただけでも仕方がない。手当たり次第に捜していくしか手立てがないか。

全体を歩き回っただけで優に一、二時間はかかるだろう。捜す範囲を絞り込んでも一時間で済むかどうか。

時刻はもうすぐ三時半を刻む。早く行かなければ奏と三条に迷惑を掛けてしまう。奏からは盛大なブライニングを食らわされ、三条からは慈悲に満ち溢れたフォローを受ける。そんな未来が事細かに頭の中で再現された。

早いところ行かなきゃな。

駆け足気味で探し始め三、四分。少々の体力を犠牲にして二人を見つめる事に成功した。というのもあの二人が意外と近くに居た事ともう一つの要因が重なった結果早く捜し出せたに過ぎない。

もう一つの要因とは何か。それは、目の前にある状況だ。

「おそ〜い。なにグズグズしてたの？ とつくに時間過ぎてるよ！」

「まだ五分じゃないですか。許してあげましょうよ。神崎君。わざわざ忙しい中来て頂いてありがとうございます」

花も恥らう女子高校生二人が、子供たちの戯れる広場のど真ん中で、優雅にティーパーティーを開いていた。ご丁寧にもテーブルまで展開して。

「おい、待てお前ら。明らかにおかしくないか？」

「なにが？」

「何がって。俺が言いたいのは何でこんなところで茶会をやつてんだよ！」

俺の発言にポカンとするのも束の間、奏は人差し指を一本たてチツチツと振り、叩きつけるように言った。

「おかしいのは宗やんでっせ。女の子を待たせるのは、すんごく重い重罪なんだぞ。ちゃんと直さないと文っちに愛想を尽かされて宗やんがラブゲージ不足で遠い星の彼方に！ 夫婦関係の危機だ宗やんの生命の危機だ！」

「話が全くかみ合わない上に意味が分からない」

くそ。奏相手だといつも調子を狂わされる。独自の世界を築いているからか、いつの間にか奏のペースに引きずり込まれてしまう。よい回避案は一つもない。

「とにかく場所を移そう。あそこの木陰がいい。丁度涼しい風が吹いてるし、日光も遮られる」

結局強引に話題を戻すしかなくなる。あの世界に入ってしまったら終わりだからな。

またしても不安そうな声を上げる奏を無視しつつ、三条に謝りつつ、広場の端へと移動した。

付近にいた人々の視線が突き刺さるように痛かったのは言うまでもない。

「さあ、改めてティーパーティーを始めましょう」

三条はそう告げると、折りたたみのテーブルを展開し、手際よくティーセットを並べる。

穏やかな雰囲気。

終始感じていた周囲の奇異な目線もなくなった事も手伝って尚更それを実感する。

「ティータイムのはじまりはじまり」。何だかわくわくしてくるね、宗やん」

「お芝居みたいだな始め方だな。でも確かにわくわくするよ。俺、こつこの初めでだし」

「一回もお茶会とかに参加しなかったんだあ」

「周りに開くやつがいなかったからな。奏はどうなんだ。やっぱり何回かあるのか？」

「あるある。ナギとかお母さんとかとたまにやるんだよ。最近はナギと一緒に多いかな」

「三条と？」

「はい。ティーパーティーをする際には声を掛けさせて貰っています。奏さんも忙しい身であるにも関わらず、こつこつして毎回参加して頂き、本当に感謝しています。一人でお茶会は寂しいものですか」

三条は微笑みを湛え、奏に感謝の気持ちを伝えた。それに奏が恥ずかしがる。

「いやだなあ。そんな照れるじゃん、ナギ。私は好きで参加してるんだし、むしろ声を掛けてくれるナギに感謝だよ」

「ふふっ。ありがとうございます。そう言ってくれるだけで私は幸せです」

互いに笑いあう二人。その様子、言葉、どれを見ても彼女たちの仲の良さが伝わってくる。二人は誰から見ても親友同士、決して過言ではないはずだ。

「お湯も沸きましたし、さっそく淹れていきますね」

手馴れた手つきで三条は各々の紅茶を用意してみせ、テーブルの上に置いてあったバスケットからクッキーを取り出す。

「本日はダーズリンとチョコクッキーです。どうぞ召し上がってください」

目の前にはゆらゆらと湯気が立つティーカップと、小さなチョコチップが散りばめられたチョコ生地のカッキーが出された。カップからは甘く優雅な香りが漂ってきて鼻腔を適度に刺激する。一口飲む。

「……………うまい」

「ダーズリンはインドの北東部とヒマラヤ山脈付近の地域から生まれた紅茶で、特有の奥深い香りと豊かな味わいは『紅茶のシャンパン』とも言われるほどなんです。ゆつくりと味を楽しんでくださいね」

「ん〜。ほんといい香りだね。それにナギの蘊蓄うんちくを聞くともつと美味しく感じるよねえ。さすがナギ。策士ね！」

褒めているのか微妙な言葉に三条は素直に喜んでいる。「そんな私、照れちゃいます」と、頬をほんのり赤らめ、もじもじしている。何だか可愛らしい。いつもの穏やかで、大人びている教室での印象とは違う三条、その女の子らしい行動に思わず心臓という鐘が大きく音を鳴らす。絶対に今、俺の顔は三条と同じように赤いはずだ。

しかし、直後、俺はこのような事を考えてしまった事を、更に今ここでそう思ってしまった事を後悔した。

まずい、やってしまった。ここにはあの奏がいるじゃないか！

脳裏に流れる一つの思考。奏に見られたらどうなる？ 「絶対に文っちに報告しないとね、浮気は禁物だぞ」「みたいな発言をするに決まっている。あるいはもっと最悪な、弱みを握って俺にあれこれ命令するかもしれない。間違いない。奏なら、やる！

視線を右側に座っている奏の方へと合わせる。

「……………」

「……………」

ばつちり目が合った。というかばつちり見られてた。

油断大敵。奏の目からはそんなメッセージを受け取れる。

冷や汗が頬を伝い、顎からぼと落ちていく。生温い汗の感触、落ちていく滴、遠くから聞こえる梢の揺らぐ音や道行く人々の声、それら全てが鮮明に感じた。

終わった。

「？ どうしたのですか、神崎君」

「え、いや。なんでもないんだ」

妙に歯切れの悪い俺に三条は首を傾げるが、すぐに意識を紅茶へと移したようで、涼しげな顔で一服する。

「……」

奏はというと、こちらも涼しげな顔で紅茶を楽しんでいた。だが愉快そうに口元が三日月状に歪み、悪魔という異名を付けられてもおかしくない様相をしていた。いくらカップで隠そうとも、端から覗くそれは見え見え。確実にこれをネタにからかっかけていく、もしくは脅すつもりだ。怖い。人権そのものが危ぶまれる、まさに非常事態というべき状況だ。どうにかして事態を打開しなければ……！

「宗やん、宗やん」

「はい、何でしょうか」

「下手なことほしくないようにね」

打つ手無しだった。

(2) (後書き)

感想、意見、指摘などお待ちしております。

感想欄の方までご一報、よろしくお願いします。

宗「このグダグダトークのコーナーは次回から一時お休みいたします」

文「楽しみにしていた皆さん。すみませんでした」

宙「楽しみにしていた人いるのですか？」

渚「何人かいると思いますよ」

奏「紅茶、おいしいね」

楓「私も飲みたかったな……」

宗「12月に再開するみたいなので。では」

(3) (前書き)

予約投稿です。

その後は三人で学校での事、最近ハマってる物、学園祭の事を話題に盛り上がった。学校での話は主に、奏が俺や和志をいじっている時の事が八割を占めていたが、三条も笑ってくれていたし、この際だから気にしないでおう。

楽しい、悲しい、恐ろしい、様々な感情が入り乱れた時間が緩やかに過ぎていき、時計の針は既に五時前を示していた。近頃は日の落ちる時刻が早く、今でも薄っすらと空が赤みを帯びている。

「今日は誘ってくれてありがとうな。紅茶もクッキーも凄くおいしかったよ」

「お口に合ったようで安心しました。また次の機会があればお誘いしますね」

「ああ。次は俺からも何か持っていくよ。大層な物は用意できないと思うけど」

「いえ、気持ちだけで十分です。神崎君とお話できるだけで十分……」

「どうした三条」

三条は胸元に手を当て、目を伏せため息を吐いた。比較的涼しいとはいえ外気は夏のそれ、長い間外にいた上に、ほんの少し顔も赤い。もしかしたら疲れが溜まっているのかもしれない。風邪で熱でも出したら大変だし、早く帰宅させた方が良さそうだ。

「宗やんは大変だねえ。これで三人。あと二人は行けそうだね」

「行けるって何が」

「まだまだ教えぬよ。否教えん。文つちを君が落とすまではねっ！」

意味不明だ。何をどう落とすと言うのだろう。ま、これまで奏の発言を理解できた例は^{ためし}ないから、とやかく言うつもりはないけど。

「では帰りましょうか。これ以上いると完全に暮れますし」

解散しようとの三条の提案に二人とも賛同しお開きになった。

「三条、送っていいこうか？ 寮とはいっても少し距離あるだろ」

「いえ、お構いなく。私よりも奏さんを送る方が宜しいかと」

「私？ うーん。別にいいよ。足には結構自信あるし」

「足は全く関係ないですよ。私は学校の敷地内を歩くだけですし、距離もかなり遠くはありません。奏さんは一駅分の距離を徒歩か自転車で移動しなければならぬでしょう？ まだ幾分か明るいといえ十分に危険です」

珍しく饒舌に話す三条の姿に驚きつつも彼女の言葉に耳を傾ける。

「欲望まみれの狼が現れるのかもしれないよ？ もし奏さんの

身に何かあつたら。私は……私は……！」

三条はわざとらしく袖で目元を拭い、よよよと今時漫画ですら見掛けない泣き方をしてみせた。正直驚いて一言も発せられない。三条ってこんなキャラだったか？ 内容も内容でおかしいし。

「なので奏さんは神崎君と一緒に帰ってくださいね。分かりましたか？」

「い、いやあナギ？ 私は本当に問題な」

「問題なくありません。神崎君にしっかりとエスコートして貰って下さい」

「え、エスコート？ 私は必要ないよ？ 大丈夫だからあの」

「分かりましたか、奏さん」

「Yes, my sister」

奏が言い終わる前に三条は改めて確認する。その形容しがたい迫力に奏は顔を引き攣らせ、戸惑いを頭にコクンコクンと大きく頷いた。思わず英語になってしまったのも、ただ単に混乱しているだけだろう。あの奏を手懐ける三条。なかなかやる。今度コツでも教え

て貰うか。

「神崎君。奏さんをお願いしますね」

「は、はい。仰せのままに」

三条はしっかりと俺の目を見据えそうのたま言う。俺は俺で恭しく、配

下の者のように応^いえるのであった。

「わざわざありがとだね、宗やん。おかげで安心安全な下校ができるよ」

あの後、俺は三条に従って奏を自宅まで送っていた。まだ残暑の続く九月の下旬、五時になっても別段暗くなるわけがないと考えていたが、実際は違い、五時半には街は焼きつくような濃い夕焼けの色に染まり、六時過ぎに空は何もかもを吸い込んでしまつかのような漆黒に包まれてしまった。夜空に光る数粒の星屑、薄っすらと雲がかかり色彩が淡くなり在り来たりな色を出す月、街灯や家の灯りによって浮かぶ地上の造形物。全てを許容し内包する夜空は例外なく俺らも包み込む。

「気にしなくていいよ。三条に言われたってのもあるけど、結局は自分の意思でこうしてるからさ」

「えーっ。そんな事言ってるのいいのかな？ 私が心配で見送ったなんて文つちが知ったら、きつとぶんぶん怒るんじゃない？」

ニヤリと怪しげな笑みで奏はこちらを見てきた。俺は不思議な面持ちで疑問を口にする。

「何でさ。別に怒らないだろ。むしろ偉い！ とか言って頭を撫でてきそうだ」

「そうかな？」

「そうだろ。まあ万が一怒られたとしても後悔はしないけどな。」

その代わりに一人の女の子が無事だったら安いものだろ？」

「……」

本心からの言葉を、らしくもなく奏に伝える。突然奏は顔を背けしばらくの間無言の時間が続いた。俯き気味なためどのような表情が窺うことは出来ない。その代わり真っ赤になった耳がふわふわ髪の毛の合間から覗く。変なことでも口走ったのか？

「ねえ、宗やん。もしかして狙ってやってる？」

「何が」

「……だよ。だからこそ文つちが困ってるんだよね」

これは由々しき問題ね、と誰に言うでもなく 俺に対してでも、周辺の人に対してでもなかったため、そう判断した 奏が呟く。しばらくして、真剣な顔つきになった奏は、幼い子にものを教えるような物言いで俺に忠告した。

「……いい？ 文つち以外には、ぜつつたいに言わないように気を付けて。じゃないと誤解されたり、女誑おんなたらして噂されるから」

「女を誑しこむような真似はしたことないんだけど」

「無自覚でも罪は罪なのですよ」

自分の発言には責任を持たないと。じゃないといつか後悔するから。奏もまたらしくなく、説法じみたことを説いた。いつも自由奔放で、遊びが大好きな彼女とはかけ離れたその言葉に驚き、同時に深く考えさせられるものがあつた。

意識が埋没する。

自分の発言に責任を持つ。一見簡単そうに見えるが、実質かなり難しく厳しい。果たしてこれまで自分がやると決めた事を最後まで遣り通したのは何回あつたのか。数えるほどしかないだろう。他人へ注意した事をすべからく自分で守れているのか。大半の者が破っているだろう。発言、注意は自分を束縛する事と同義だ。無闇な言動は慎むべきだ。言葉は救いであり、祈りであり、鎖であり、また刃である。

意識が浮上する。

しばらく奏と雑談しながら歩を進めていると、急に奏が立ち止まった。

「宗やん。私の家、ここだから」

「ん？ もう着いたのか」

「もう着いたのです。送ってくれてありがとう。また遅くなるときはよろしくー」

掛け値なしの、目が覚めるような惚れ惚れとする笑顔が咲く。無邪気な様子の奏に、ああ中学生の頃と変わらないなあとほんの少し

だけ嬉しく思い、そんな感情を見せないように、呆れたように装い目を閉じ、俯き、わざと溜息を吐く。

「何なりとお申し付け下さい。じゃ、また明日」

「うん、また明日。私の騎士様 今日忠告した事、しっかりと覚えておいてね」

いえいとピースサインを俺に突き出して、すぐに翻り、マンションの中へと駆けて去っていった。ったく、何が私の騎士様だ。お前の配下になった記憶はねえよ。苦笑しつつ俺は天上に点在する星々を眺め、自宅へと歩き始めた。

必死に身を犠牲にして神々しい輝きを放っている星達。月と街灯という光源と、薄く広がる灰色の雲の妨げをもともせず光る彼らに一種の尊敬と憧憬を覚える。力強く、神聖な姿と比べて俺はちっぽけでひ弱な存在に思えてくる。実際そうなのだろう。彼らを見て思う。俺は、一体何を目標に生きていけばいいのだろうか。ちっぽけな俺はこれからどう長く険しい道を歩いていけばいいのか。やけに最近自分自身があやふやだ。あやふや過ぎて道標すら見つけられずにいる。未来を一片たりとも予想することの出来ない俺は、何を手がかりに進めばいいのか。

誰かの為になりたい、支えになりたい。その想いは幼い頃より持ち続けている。かと言って消防士や警察官になりたい、というわけでもない。身近にいる人達を守る。それだけで十分だし、他人を救えるような力、いや意思はない。身の丈にあつた世界の中で誰かを守る、支える。何処かで聞いた言葉だが、俺にぴったりのものだと思う。大切な人達を自分の手で守り抜くことに一抹の不安を抱く俺には。

(3) (後書き)

感想、意見、指摘を待っています。

感想欄の方までよろしくお願いします。

9月18日(1) (前書き)

大幅改訂しました。
内容がかなり変更されています。

9月18日(1)

白い光が目飛び込んでくる。

眩しい。

まず最初に抱いた感想はそれだった。まだ働いていない脳に喝を入れ、時計を確認する。時刻は午前六時四十五分。もうそろそろ目覚ましは鳴ろうかという時間であった。一瞬このまま起きるか、はたまた二度寝をするか。どちらの選択肢を取るか迷った。しかし、この問題はすぐに片づいた。

「寝るか」

布団にもう一度くるまると、静かに眠りに落ちていった。

そして俺は遅刻した。

放課後、俺は久方ぶりに図書館へと足を運ぶことになった。普段自分から思い立って訪れる事など一切なく、正直館内に入るのは調べ学習、四カ月以来となる。校内で俺との関係性が薄い場所ランキングでは堂々の三位に入賞した図書館になぜ赴いているのかと言えば、話は今朝に遡る。

今朝全力疾走、尋常じゃない量流れた冷や汗、長らく使うことになかったショートカットコースをフルで動員したにもかかわらず、結局遅刻した俺は、あの影の薄い中津先生に鬼の形相で叱られた。その後良い笑顔で中津は罰として漢文を現代語訳に直すという課題を贈った。嬉しくないプレゼントに思わず涙を流しそうになった。もし言い訳をさせて貰うことを許されたなら、「まさか目覚ましをかけ忘れた上に、文が委員会の活動で早く登校していたなんて夢にも思わなかった」と熱弁を奮っていたらう。

運が悪いというか、自分が非常にだらしない人間であったと改めて認識させられた朝だった。というか色々あってテンションが異常

だし、思考回路があらぬ方向に向かっていた。正常な判断？ 下せそうにない。

奏の精神攻撃に耐え切り学園内の敷地を歩いていると、白いコンクリートの大きな建物が見えてきた。これが我が学園の三大建築物の一つ、山上図書館だ。外見はとてもシンプルで、五階建てという並外れた高さ、一階につき千六百人は収容できるだろう広さ、そして何よりその膨大な本の量。ここに勝る図書館は日本国内には五本指に収まる程度しかないはずだ。

今日俺がここにやってきた理由は、漢文の訳が載っている本を見つけ、丸写しする、効率的且つ正答率百パーセントの素晴らしき計画の為だ。この完璧な計画を実行すべく図書館の中へ悠々と入った。

「いつ見てもすごいな」

本の森という表現がぴつたりな図書館の中には、何回来ても驚くくらいの書籍が並んでいた。見付けるのに時間がかかるだろうが、楽するため、いや、計画の為なら努力は惜しまない覚悟だ。入り口近くに置いてあるコンピュータを用いて場所を検索する。

「孫子は、と」

おおよそ一分待つと検索結果が出る。どうやら二階の奥にあるみたいだ。結果をプリントアウトし手に取ると、一冊の本を求め森の中を進んで行った。

十数分後、二階へ行き、目的の本を手に入れた俺はほくほくとした表情で元来た道を辿っていた。視界の端に知り合いが映った。楓だった。

「よっ、楓」

声を掛けると楓は会談の半ば程で立ち止まりこちらへ振り向いた。会談スペースで勉強していたのだろうか。胸に抱え込むように二つ大きなフォルダを持っていた。フォルダの背には「委員会」の文字が見えたので、HR委員会の活動をだろうと憶測を立てた。

ここの図書館は読書をしたり、調べ物をしたりする以外にも使われる事が多い。今俺が居る地点、階段の上から見て左側、上つてくるときの右手にある通路をしばらく道なりに進むと、楕円形のテールブルが幾つも並ぶちよつとした会談スペースが現れる。学校にある会議室が何かの用事で使われているとき、代わりにここか、三階の小部屋を使用される事がかなりの頻度であり、小部屋が十二部屋用意されている。ただ二階は、三階のものより広い代わりに、声が響きやすく、あまり大きな声で話すことができないため、委員会などの雑用、緊急集会、自習くらいにしか行われない。恐らくそこを使用していたのだろう。

「宗一？ 珍しいわね。あんたが図書館に来るなんて。何か探し物でもあるの？」

少し目を大きく開き楓は訊ねてきた。

「用事はもう済んだ。お前も帰るところか」

「ええ、そうよ。雑用を沢山押し付けられてね。迷惑だわ」

そう言いながらも楓の顔は全く嫌そうではなく、むしろ遣り甲斐があるとかでかかと綺麗な肌に書いてあった。

「あ」

「どうした」

いきなり素つ頓狂な声を出した楓はいい事思いついたとにやりと笑い、何の脈絡もなく「道草して近くのカフェでケーキ食べない？」と提案してきた。

「どういふ風の吹き回しだよ。もしかして奢らせる気が」

「そんな惨い真似は今ほしないわ」

「する時が来るのか」

「で、どうするの。行く？ 行かない？」

「別にいいけど」

カフェの同行に了承すると、楓は目を輝かせ突然俺の手を掴むと、階段を勢いよく下りていく。急に下方向に引つ張られ踏鞴たたらを踏みながら必死について行く。

「お前、館内を走るな！ 引つ張るな！」

「委員長みたいな事を言わないでよ。足がついてるんだから走らなきゃ損よ」

「おい、HR委員長が何を言う」

そのまま館外へ、校外へと俺は妙な体勢のまま連れ去られた。その間大勢の人から奇異の視線に晒された事は言うまでもない。

9月18日(1) (後書き)

すみません。不定期更新となります。

春夏冬の休みくらいしかPC触れられないので。

ポメラ買うかどうか検討中。

完結は必ずします。いつになるかは分かりませんが、
変なあとがきになりましたがこれで。

(2) (前書き)

久方ぶりの投稿です。
ちよくちよく更新していく予定です。

校外へ飛び出て二十分あまりが経過した。路地裏を道なりに進むと、風情あふれる木造建築物が見えてきた。寂れ、無機質で、且つ僅かに温かみを帯びているようにも見える不思議な建物が建ち並ぶ辺りに対して、それは唯一、他とは違う類の温かみを持っていた。

「あそこが目的の店。見てくれは古臭いけど、でもすごくケーキがおいしいのよ。」穴場の店”っていうのは、まさにあの店のことを言うのね」

爛々と目を輝かせ、舞うように路地を突き進んでいく楓。その姿があまりにも微笑ましくて、あまりにも可愛くて、普段の少し不機嫌か小難しい顔とは違う表情に、自分でも分かるくらい顔がにやついてしまっていた。

「何にやにやしてんのよ」

「別に、なんでもない」

可愛かったから、なんて言った暁には拳と蹴りと「死になさい」の応酬が待っているに違いないので曖昧に誤魔化しておいた。下手に口を滑らせて、この先続くであろう人生に終止符を打ちたくはない。

「言いなさいよ」

「無理」

「言わないとその華奢な首を芸術的に手折るわよ」

「切断面が花みたいになるのか？マジで勘弁」

楓と暴力はどうやっても切れない、魔法のような繋がりがあるみたいだ。今度それを切断する手段でも考えてみるか。

「まさか、口に出せないようなことでも考えてたの？変態。だからにやにやしてたのね」

「出せなんじゃなくて出したら殴られそうだからだって」

「殴らないから言ってみなさい」

「えー」

「言いなさい」

「可愛かったから」

蹴り飛ばされました。

涼風を彷彿とさせる鈴の音が鳴るとともに俺たち二人は店内に入った。

ランプの橙色の光が天井から降り注ぐ。焦げ茶色をした木製の家具が静かに座っている。

辺鄙とまではいかないが、少々面倒な位置に店を構えているにも関わらず、十数人も客が楽しげに、あるいは穏やかに注文した品を食していた。歓談する者、読書をする者、意識を何処かに飛ばしている者。十人十色な行動をする客たち。ちよつと面白い。

「このケーキ、とてもおいしいのよ」

空いていた二人用のテーブルに各々腰を下ろすと、すぐに店員が現れ、注文を取りにやってきた。氷水の入ったグラスが眼前に置かれる。

「ご注文が決まりましたら、お手元にある呼び出しボタンを押してお待ちください」

「もう決まっています」

楓が流れるように告げると、店員はエプロンのポケットから注文用紙を取り出し、ペンを持つ。

「伺います」

ちらりと楓は俺の方を見た。何を聞いても驚くな、と目が言っていた。どんなものを頼むのだろうか。興味半分、恐怖半分。俺をここに連れてきたことに関係するのだろうか、とか、逆に何をされるのか、と瞬時に頭の中を複数の思考が駆け回る。だが、それらは一瞬にして停止を余儀なくされた。

「カップル限定の『ラブラブスイートケーキ』とコーヒー二つお願いします」

「ラブラブスイートケーキとコーヒー二つですね。かしこまりました」

店員が去っていく。楓は澄ました顔で水を飲んだ。まるで自分は何一つおかしなことを言っていないとばかりに。

「……なあ、楓」

「今から店を出るまで、あんたはあたしのかつ、彼氏になってもらうわ。拒否したら泣く。泣きわめくわよ」

「地味に怖い脅しをかけるな。っーか噛んだのを誤魔化そうとしただろ」

「気のせいよ」

「んで、何？ ラブラブスイートケーキ？」

「あんたの顔でラブラブとか言わないで。ギャグだわ」

「全然洒落になっていないことに気付いけ。で、それを頼むためにわざわざ俺を連れてきたのか」

「そうよ。私一人じゃ注文できないし、しかも男性と一緒に注文できないの。なら誰かに協力してもらわなきゃ駄目じゃない」

「和志に頼めばよかったじゃん」

「あんなのが彼氏なんて血反吐が出るわ」

「俺ならいいのよ」

「宗一の方がいいわ」

比較が和志となので、正直喜んでいいのか分からない。微妙な心境だ。

「あまり驚かなかった」

「ん？」

「恋人役演じてって言ってもあまり驚かなかったなあ、と思っただけよ。もしかして、結構そういう頼みとかされるの？」

「一切なし」

「まさか、さ。あたしを女の子として見てない、とか？」

テーブルに肘をつき、指を交互に絡ませ、楓はその上に顎を乗せ

た。潤んだ瞳で上目遣いで見つめてくる。あたしに全く興味がないの？ と艶美な囁きが聞こえてくるようだ。楓の瞳の中へ吸い込まれてく感覚に体が支配される。

不意に何かが脳裏を横切った。

脳の表面を針でチクチクと突かれるような刺激を感じる。それとともに手繰り寄せられる、置き忘れた記憶の断片。

誰かの笑顔。

青い花。

トラック。

ガラスの破片。

大切な何かが抜け落ちている。何が？ 何処に？ それ以上思い出そうとしても霧に邪魔されて手がかりさえ掴めずにいる。一歩も先に進めない。何が俺を阻んでいるんだ。俺を束縛するものは一体何なのか。ぽっかりと空いた穴に塞がる。ピースは何処にある？

「お待たせいたしました。ラブラブスイートケーキとコーヒーです。以上で宜しかったですでしょうか」

店員の声に意識を戻すと、目の前にはやや大きめの白い皿の上に悠然と乗っかるハート形のケーキがあった。赤紫色のソースベリー系と思われる がジグザグに、チョコレートでコーティングされた表面に掛かっていた。コーヒーの、あの焙煎されたことによつて生じる独特の深く芳ばしい香りが鼻孔をくすぐる。

「おいしそうだな」

俺の平凡すぎる感想に楓は苦笑した。

「おいしそう、じゃないわ。おいしいに決まってるの。早くいただきますよ。溶けない内に、冷めない内に、ね」

今まで見たことのないくらい上機嫌な楓に、またもや笑ってしまいそうになり、何とか表に出させまいと懸命に努めた。

さっそく楓はケーキを一口食べると、目をぎゅっと瞑り、身をよ

じった。どうやらとても上手いのだそうだ。

「そういえば俺の分が見当たらないんだけど」

「え？ あるじゃないの」

「いや、コーヒーじゃなくてケーキ……」

いくらテーブルの上を凝視しても新たに皿が出現するわけではなく、先ほど運ばれたものが鎮座するのみだ。

「何言ってるの」

楓は首を傾げ、さお当然のように、

「このケーキ、二人で一つよ」

と小型爆弾を放り投げた。

「なんで」

「だって、ほら。よく見なさい。一人分にしては大き過ぎない？」

ハート形のケーキを再度見る。よくよく観察してみると、高さは五センチメートル、縦と横幅は大体十五センチメートル四方（形が複雑なため正確ではないと思うが）あった。確かに楓の言うとおりだ。まあ元々カップル用に作られたものだから当然といえば当然か。フォークが一つしかない事も手伝って失念していた。

……一つしかない？

「あ、そうそう。カップル専用だからフォークも一つしかないわよ」

「なんで」

「そりゃあ、食べさせ合うからじゃないの」

言いながら楓はもう一口ぱくりと食べ、表情をふわっと和らげる。対して俺は頬の筋肉を強張らせ、冷や汗というには些か大粒の滴を幾つもたらだらと垂らしていた。

「あ、食べる？」

「いやいや。そんな付き合ってるわけじゃないし」

恋人ごっこでそこまでする必要はないのではないか。そう考えての発言だった。

「今は恋人でしょ？ さっき約束したじゃない」

平然とした態度を楓は装っているが、顔全体を赤らめているため全く意味がなかった。恥ずかしいのならやめればいいのに。

「んじゃ、食べさせ合うか？」

「バカなこと言ってるとその口縫い付けるわよ」

恋人らしさ皆無であった。あと赤面して言うセリフではない。

「まあ？ どうしても言うならやってあげなくもないわよ」

「遠慮する」

「なんでよ！」

特にないと返したら蹴られるだろうから、黙り込む事に決めた。

「ほら、頬が床に転がるくらいおいしから食べてみなさいって」

「頬が落ちるくらいの間違いじゃねえのか」

「うだうだ言ってるで。さっさと口を開けなさい」

楓の頭の処理が限界に達しているようだ。俺自身も同じようなものだが。

はあ、と溜め息をつくと大きく口を開けてみせる。

「えぐい」

「早く食わせろ」

楓はケーキをフォークで器用に切り取ると、俺の口内へと運んだ。口一杯に広がるビターチョコの香り、ラムレーズンの豊かな味わい、パウンドの柔らかな食感。なるほど、「甘いだけがラブラブではない」というシェフからのメッセージだと俺は受け取った。

「……うまい」

「よかつたわ」

純粹な賞賛に楓が我が事のように喜ぶ。今日はいい事でもあったのだろうか。中学から約四年間の付き合いだが、ここまで開けっ広げに喜ぶ楓は初めて見る。

「たまにはこういうのもいいものね」

歩くような時間の流れを感じながら過ごす。このこそばゆくも心地よい雰囲気身を任せる。

「ごちそうさま。じゃ、勘定はよろしくね」

「……は？」

その数分後、店の前には、ケーキ代、コーヒード代を全て押し付けられ、財布を見つめ続ける俺がいた。

二度と楓と二人で出かけてたまるか。

9月19日(前書き)

予約投稿です。

9月19日

本日は金曜日。週末まで残り後僅かとあつて気持ちも宙に浮くように上向き、足取りも軽やかとなる。雨雲が空全体に広がっており、見るだけで鬱屈となるような天候だが、そんな気持ちを一片たりとも感じさせないような軽やかな、普段どおりの会話を俺と文は交わし合った。

平和、平穩、嗚呼何と素晴らしき響き。

なるべく長く続いて欲しい、出来れば永遠に、そう祈るのは別段俺でなくとも大多数の人が思う事ではなからうか。暗闇と暴力に支配された世界を望む奴なんて居ないだろうし。居たらそいつは病気だ。

談笑しながら校舎へと足を進めていると、

「せーんーぱーいー！」

後ろから賑やかな声が聞こえてくる。振り返ると宙が物凄い勢いでこちらにやって来ていた。砂埃を立て疾走する様は、正に全力疾走の鑄型。その速度は自転車で走つたのと変わらない程度だ。

「明らか俺らに突っ込んでくるよな」

冷静にこの後起きるであろう事故を想定する。逃げたら追いかける上に威力倍増。留まっていたら昇天しかねない。避けたら宙が怪我をする。さて、どうしようかな。

「宗くん。身代わりになつて」

「身代わりも何も、ターゲットは俺だろうからお前に被害は及ばないだろ」

「わ、私ね、毎日病院に顔見せに行くからね」

俺が重症を負う事を前提の発言だった。確かに。俺も腹を括らなきやいけないみたいだ。宙を受け止めるしかもはや方法は無い。

「死なないでね」

「ああ、迷惑掛けてばかりですまなかつた。もしもの事があつた

らよろしグフオウ！」

「先輩！ お久しぶりです！」

宙は加速したまま勢いを落とさず、そのまま俺にダイビングしてきた。宙と正面になるよう構えていたので受け止めるのは容易かった。宙が地面に倒れこむ、という事はなくなつたが、代わりに腰から鳴ってはいけない音が鳴ってしまったのを聴覚が感知した。宙を地面に下ろすと、俺は地面に膝をつけ腰に手を当てる。

「ガハツ。……毎日教室で会つてるだろうが。てか会いに来てるじゃねえか」

「愛に生きてる？ はい、先輩にメロメロです」

どや顔で宙が要らない宣言をする。宙が山上学園に転校して来てから早三日目、朝や昼休みに顔を合わせ、他愛無い会話をする程度の間柄に俺達はなつていた。奏に関しては宙と一緒にゲーセンに行つたりしたらしく、昨日仲良く喋っているのを見かけた。奏の影響もあつてか、口調も砕け、彼女が抱いているであろう気持ちを全開にしている。奏に大分毒されてきたらしい。嬉しくないわけではないが、人の目があるところでアタックされたくはない。いや、本当に嬉しいけれど。

「どうしたんです先輩。私の恋の勢いにたじたじですか？」

「腰痛めた」

「誰がそんなことを！」

お前の所為だよ、という言葉は鈍痛によつて喉元から腹の中へ押し戻された。隣に文が駆け寄り、大丈夫？ と優しく声を掛けてくれた。ありがとう、文。でもお前、さつき身代わりになつてと言つたよな。俺は忘れないぞ。

「宙よ。何故ダイビングしてきた」

「ふふふ。これは愛情表現の一種です」

「お前が飛び込んでくると頭が丁度鳩尾に当たるから凄く痛い」

「遠まわしに身長が低いって言われた気がします」

間違いない。

「むむむ。あ、そうか。あと数年すればぴったり心臓のところ
飛び込める。つまり私が成長するまで待つてあげるといわけです
ね」

少し休んだおかげか、腰の痛みがある程度引いたので立ち上がり、
また歩き始めた。文が不安そうな顔で見つめてきたので、大丈夫だ
と微笑んで見せた。途端に赤面し俯く文。気づかずに俺との会話に
終始する宙。俺は宙の言葉を受けて、尚も会話という名のからかい
を続ける。

「成長しませんように」

手を合わせて願う。

「何て残酷な願い！ それじゃあ私の愛情が先輩に伝わらない！」

「お前の愛情表現は直球だからな」

「もちろんストレートです。なるほど、ど真ん中過ぎて受け止め
きれないということですね！」

「キンキンに冷えたバツドはないかな」

「打ち返す気満々!？」

「かつ飛ばすぜ」

「その熱意を私に一割だけでもいいので注いでください」

「善処する」

「大人な受け答えにメモメロです。さすがは先輩」

「大変遺憾です」

曇り空をふと仰ぎ見て思う。平和って続かないよな。

「神崎先輩。今朝はすみませんでした。つい嬉しくなつてやつて
しまいました」

昼休みに入り、文、楓、和志と一緒に昼食を採っていた。今日は
全員自前の弁当、または菓子パンを持ってきていたので机を固めて
仲良く食べる事にした。食べ終わり一息ついていたら時、全校で噂の
転校生である宙が我がクラスの教室に入ってきた。真っ直ぐこちら
にやって来た宙にどうしたのかと訊くと、今朝仕出かした事を謝罪

したいとの事だった。その気持ちは素晴らしい、偉いと思うのだが、理由があまりにも曖昧というか可笑しかったので俺は豈図らんや（あにはからんや）、嘆息してしまった。

「殺つてしまいました？ 死んだらどうする」

「大丈夫です。先輩は簡単に倒されるような柔な人ではありませんせん」

「あんたら。物騒な話をしないでよ。あと和泉さん。宗一……神崎は超人じゃないから」

文と雑談をしていた楓は気になっていたのか俺と宙の漫才に乱入してきた。ある意味あり難い。このままグダグダトークをする予感がして競々（びくびく）していた。

その後宙を許し、残り僅かではあるが宙も混ざつての雑談となった。後輩が先輩と関わる事自体珍しいのだが、違和感無くこの空間に馴染んでいた。彼女が持つ力なのか、それともクラスにいる人全員が並外れた包容力を持っているのか、定かではないが騒ぎにならずに済み安心した。あ、そうだ。

「そういえば来週の火曜日、休みじゃん。みんな何処か行く予定ある？」

「秋分の日？ 大した用事は無いけど」

「そっか」

「私は部屋の掃除かな。宗くんの家も掃除しに行つていい？」

「いや、俺にやらせてくれ」

「私の部屋！？」

「いや、俺の家の掃除な」

「俺はグラビアの写真集をかき集めて鑑賞するつもり」

「あんたは口開かなくていい」

良かった。全員これといった予定はないみたいだ。

「でも急にどうしたのよ」

「いや、あのさ、最近こうして皆が集まる機会って少ないからさ。ここは一つ、思い出作りでもしないか」

「思い出作り、ねえ」

楓が訝しげな表情で呟く。

「文化祭もある忙しくなるけどさ、これから先は受験勉強とか、大学とかあつて顔を合わせる事すら難しくなるし。だから今の内に出来る事はやっておきたいと思うんだ」

「このところ、卒業した後俺達の関係はどうなっていくのだろうと不安に駆られる事が多々あつた。勿論いつまでも変わらない関係など無い。だからというわけではないが、例え疎遠になつたとしても、思い出は変わらないから、消える事はないから、俺はそう提案した。」

「……私はいいと思うよ」

俺の発言に逸早く反応したのは文だつた。

「今でしか出来ないこと、たくさんしたいって気持ち、私もあるから」

文の言葉を受けて、楓、和志が賛同の意を伝える。

「そうね。私も一生物の思い出、欲しいかな」

「俺も賛成。女の子とウキウキキャハキャハしたいし。楓なんかもOK」

「あんたは来るな、参加するな、家に引きこもつてなさい」

「ひどいいいいいぎがぐるじいいいいいいい」

「宙は？」

和志が楓に首を絞められている間、宙にも意見を求めてみた。すると宙は不思議そうな様子で「え、私ですか？」と驚いた。

「あ、あの、私、邪魔にならないですか？ 先輩方の集まりなわけですし」

戸惑いを顔にする宙に楓がくすりと笑う。

「そんな、邪魔なわけないし、もしそうだったら和泉さん、ここにいないわよ」

「そうだよ、宙ちゃん。細かいことは気にしなくてもいいと思うよ。あ、でも無理にとは言わないよ？ 何か用事があつたらそつち

を優先して」

「いえ、ぜひともお願いします。神崎先輩と共に居られるなら私は本望です」

鼻息を荒くさせ顔をほんのり赤らめながら宙が参加の意を唱えた。

「でも文、まだ具体的な事決まってるじゃないんだけど」

「決まってるじゃない？ うん、そうだね。でも宗くんは具体的な案はあるんでしょ」

「まあ、あるにはあるけど」

曖昧に暈す俺の言葉に楓が先を促す。

「何よ。煮え切らないわね。早く言いなさい」

「おう。その前に和志そろそろ離そうぜ。顔真っ青だから」

「あ、ゴメン」

パツと楓が和志から腕を離す。力が入らないのか和志は地面に倒れ伏せる。和志は「このまな板め」と恨めし気に言うが、楓に腹のど真ん中を踏まれると意識を手放した。

「はい。大丈夫よ」

「何が」

「聞く準備」

楓の、人の意見を聞く準備はどうやら和志を沈める事らしい。南無。和志以外こちらに耳を傾けているのを見て俺は言った。

「……あのさ、海に行かない？ シーズンから外れてはいるけど、まだ暑いから水着でも寒くないと思う」

「という事は先輩。私の水着姿を見せ付けられるんですね」

「目をキラキラさせて言うことか。てか大分碎けてきたな。その方がいいけど」

「無問題です。敬語と敬意は忘れません」

「ってわけでどうだ？ 宙はいいみたいだけど、文と楓は？」

「別にいいわよ。ただ天候に左右されるから雨天の時の計画も立ってないといけないけど」

「私もOKだよ」

二人の賛成の言葉を聞いた所で予鈴が鳴った。

「じゃ、詳しい事は後日知らせると言うことで」

「秋分の日には海へ行くは決定ね」

「はい。では先輩方ごきげんよう」

宙が颯爽と教室内を駆け抜け、自分のクラスへと去って行った。

「楓。和志、どうする」

「放置」

簡潔且つ明瞭、そして残酷な返答に言葉を失ったが、それではないだろうと俺と文で和志の復活に善処した。教師が来る前に目を覚ませることに成功し、正直奇跡は本当にあるのだと思った。

9月20日(前書き)

予約投稿です。

期末試験がとても憂鬱。

受験が間近に迫ってきて、もう汗がだくだく。

9月20日

本日は土曜日程のため、授業は十二時二十五分を以って終了した。机の中にしまつてある教科書やノート、筆記用具を鞆の中に収める。一応その中を覗き、忘れ物の有無を確認した。問題なし。後は自宅に帰るだけとなり、心身ともに浮き足立つ。これから月曜日にかけて、学生全員に課せられる義務から俺達は解放されるのだ。喜びこそすれ、鬱屈になることはあるまい。

「んじゃ、宗一。また来週な」

「おう。バイト頑張れよ」

俺は友人に、教室に、校舎に颯爽と別れを告げ、半ばスキップをしながら廊下を渡る。

校舎の外を夏の残り香を肌と鼻で感じながら歩く。一部の木々が紅葉をし始め、秋らしさが目立ち始めた。だが、全体が紅や黄色に染まるのはまだ先の事だろう。

紅葉の季節。

四季の中でも一番美しいと感じる秋。学園祭期間開始まであともう少しだ。

一人空しく帰宅する。普段は文や和志達と駄弁りながら下校するのだが、皆それぞれ用事があるらしい。

久々に周りの物を意識しながら通学路を歩いてみる。並木、花壇、クレープ屋、喫茶店、チェーン店。いつもなら気にも留めない物から、もし誰かと一緒だったら寄っただろう店に視線が向かう。

「……」

鞆を握り直し、いち早く家に帰るべく歩く速度を速めた。

『Amazing grace · How sweet the
sound · That saved a wretch li

ke me」

自室でコントローラーを手に、壮大なファンタジーの世界に浸かっている。とケータイの着信音が耳に入ってきた。コントローラー中央にある「START」ボタンを押し、ゲームを一時停止する。大剣を振り回し、奇妙な姿で現れる化け物達を屠るキャラが不自然なポーズで固まる。剣で化け物の体を真つ二つに割ろうとしている最中だったので、惨いというか、シユールというか。形容しがたい光景がテレビのスクリーン一杯に広がっていた。

そんなことより早く電話に出なければ。

ケータイの背面にある画面で相手を確認すると、「桜木 文」という文字が躍っていた。

「文からか」

すぐさま開き、通話ボタンを押すと、受話部分に耳を当てた。

『やつほー宗やん。元気にしてるかな？』

聞こえてきたのは文ではなく、やたらテンションの高い台風少女の声だった。

「奏？ どうして文のケータイから？」

『いやあ。ちよつと訊きたい事がちよちよいつとあつて』

「訊きたい事って」

電話の奥から『か、奏ちゃん。駄目だよ』と文の恥ずかしそうな声が耳に届いた。声音から想像するに、涙目になっているに違いない。

『じ・つ・は。わたしたちはなんと、デパートの水着コーナーにいるのです。いえーい、ぱふぱふー』

「で？」

『反応冷たいよ、宗やん。愛想好くしなきゃ文つちに嫌われちゃうぞ。え？ 宗やん、文つちが何があつても嫌いになんかならないうつて。文つちも言うねえ。と、話が逸れちゃった。さて、ずばり訊きます。好きな水着の種類は！ ビキニ？ セパレート？ スク水？』

後方で文が何事か言っているが、奏が上手い具合に避けているだろう。よく聞き取れなかった。

「最後を選ぶやつはかなり限られてるよな」

『特殊な性癖の持ち主だよな。それで何が好みなの？』

好みとか言われても、水着に、特に女性用のものなんて詳しくないからな。詳しくたら致命的だと思うが。

奏の今までの発言から、多分明々後日の海水浴で着ていく水着を選べと言っているのだろう。わざわざ俺の好みを訊ねる意図が読めない。もしかしたら奏の事だ、これは心理テストか、その類なのかもしれない。水着で占う心理テストなんて聞いた事ないけれど、多分あるのだろう。

「パレオだな。俺はあれが一番好きだな」

好きな水着、とつさに頭に思い浮かんだのがそれだった。自分で水着に関する知識が不足していると言いながらも、自分が好きな水着の種類をすっかり覚えていた思春期らしいというか残念な脳みそに嫌気が差した。

『パレオだね。宗やん。なかなかいい所を突くね。OK。次は、パレオの中で一番合ってる色は？ 宗やんの中で一番身近な人に着せると思ってる』

「随分複雑な心理テストだな」

『へ？ テスト？ あ、ああ、うん、そうそう。だからパッパッと答えちゃって』

身近な人か。異性で限定されるなら、やっぱり文に他ならない。もし文に着せるとしたら……。

「紫か紺の二択だな」

目を閉じて脳内でイメージしてみたが、結構似合っているのではなからうか。俺のセンスがいいか悪いかは分からないけれど。でも文だからな。何を着てもかわいいと思う。

『ありがとうね！ では宗やん。明々後日は楽しみにしててね。では、ほんじゃらば〜』

無機質な信号音が流れ、そこで通話は終わった。結局心理テストの結果はどうなったのか、気にならないことはないが、また来週になつてからでも訊いてもいいか。

再度コントローラーを両手でしっかりと持ち、ファンタジーの世界へと思考を飛翔させた。

その夜、居づらそうな雰囲気を漂わす文に、今日のデパートでの話を訊ねると。

「気にしないで！ 忘れてね。本当に何もなかったから」

と顔を真っ赤にして、この件には触れないようにと何度も念押しされた。そうか。そんな大胆な水着を買ったのか。かなりの勇気を振り絞つたに違いない。少し海水浴が楽しみになったのは、心の中に秘めておこう。これだから男は。

9月23日(1)(前書き)

海水浴の話です。

9月23日(1)

「秋だ！」

「海だ！」

「「海水浴だー！」」

「秋と海に繋がりはねえよ」

海水浴当日。天候に恵まれ、遙か遠くまで続く透き通るような青空に、俺たちのテンションが、特に奏と宙のテンションが最大値にまで上がった。

九月の中旬から下旬に差し掛かるこの時期は例年気温が低くなり、Tシャツだけでは肌寒く感じるのが普通だ。去年も上着を羽織って街を歩いていたし、今年もそうなるだろうと予想していた。しかし地球温暖化か何かが作用したのか、本日は水着で海に出ているおかしくない素晴らしい陽気となった。天候が悪いが、気温が低い場合はボーリングセンターで暇を潰す計画だったが、どうやら没になるようだ。

「みんな楽しそうだな」

「これから楽しむっていうのに何を言ってるのよ。暖かいとは言っても日は短いんだから、さっさと着替えるわよ」

「俺と和志でレジャーシートとパラソルをセッティングしてるから」

「宗くん、いいの？」

「任せておけ。和志。やるぞ」

「荷物をここまでほぼ全て運んできた俺に労いの言葉もないのか。これはもう目の保養をするしかないよな」

「目の保養だったら寝るのが一番だ」

「はっはっは。宗一、それじゃあ単なる保養じゃないか」

「和志。あんた、もし変な事したら」ただ」じゃおかないわよ」

「変な事って？」

「その首、捻じ曲げるわ」
「ひどす」

今回俺達が訪れた木ノ崎海岸は我らが街から電車で一時間、その後徒歩で十五分くらいで辿り着く。ここの整備は地域の人が一年に二、三度行うだけで、ほとんどされておらず、その為かどうかは知らないが年中解放されている。無料で、しかもちゃんと泳げるスペースがあるとあって、特に夏場において地元住民から大変親しまれている土地である。また、年明けになるとよく酒に酔った大学生がノリと勢いで寒中水泳する事でも有名だ。酔いが一気に醒めるといふ事実も含めて。いつか心臓発作で誰か死ぬんじゃないかと、ここを毎年利用している身としては結構不安である。

木ノ崎海岸の一角には、当然といえば当然かも知れないが、更衣室が設けられている。ちょっと古びた感じがするが着替えには十分その中に女性陣が入っていく。

「覗くならこっそりね！」

「覗かないでよね。覗いたら蹴り飛ばすわよ」

「神崎先輩になら、わたし……」

「そ、宗くん」

という彼女達の悪戯心や疑心暗鬼にまみれた言葉を受け、悲しくなりながらも、俺と和志でパラソルを立てた。全て和志の発言の所為である事を願うか。

袋からシートとパラソルを取り出す。更衣室からあまり遠ざけると文達が大変だと思うし、大体七、八メートル離れた地点に構えれば丁度いいだろう。パラソルを組み立てる間、覗きに行こうとか、覗きは男のロマンだ、義務だとかほざいていたので、しばし意識を手放して貰った。

レジャーシートを引き、その場で海パン一丁（既に下に水着を装着しており、その場で上着とズボンを脱ぐだけで良い）になったところで、後方から「せんぱい！」と元気の良い声が聞こえてきた。

「どどーん！ 和泉宙、ただいま参上！ ねえ先輩。どうですか

？ わたしの水着姿は」

かわいい問題児二号、いや宙が全力で駆けてきた。黄色と白の横縞模様のビキニ。胸元には可愛らしい山吹色のリボンが施され、キーンとした感じを醸していた。真っ白な肌が目に眩しい。

「よく似合ってるよ」

「惚れました？」

「否」

「一言で片付けないでくださいよ。わたし、ショックです」

「でも本当に似合ってるよ、宙」

「そ、そうですね？ ありがとうございます。えへへ、先輩に褒められちゃった」

幸せ指数急上昇中ですと言わんばかりにピョンピョン跳ねる宙。

宙と話していると奏が文の手を引いてやってきた。奏は自らの水着姿を堂々とさらけ出し、一方文はバスタオルで身を包み、恥ずかしそうにタオルを胸元でぎゅっと押さえていた。

「そーやーん！ どうよ。この愛くるしいメリハリのついた体！ 発情するなようー！」

「しない」

「ズバツと切り捨てる宗やんの言葉がわたしの身を切りきざむ。そんなことより、わたしのこの水色セパレートはどう？ この背中が大きく開いたセクシーさ。胸の谷間もフルオープン。腰回りのフリルがワンポイント。さあ何点！ 審査員、神崎宗一」

「奏だから六十点」

「わたしだから上がったのか下がったのか分からない微妙な点数をチヨイスしただとあ！？ 宗やんは策士だ！」

「策士とは言わなれないか？」

「わたしの辞書に不可能という文字はない」

「何故それを今言った」

しかもパクリだろ、それ。

相変わらず無駄にテンションの高い奏に振り回されるばかりだ。

一番最後に現れた楓が奏に呆れる。

「あんたら、もう少し落ち着きなさい。周りに人が居ないとは言え、みつともないわよ」

「いやいやいや。今は精一杯この海を、このシチュエーションを楽しむべきなんですよ、メーブル」

「メーブルって言うな！」

「なんでメーブルなんです？」

「和泉さんは余計な事を訊かないの！」

「名前が楓だからメーブル」

「なるほど」

「奏は答えるな！」

ローキックを躊躇なく繰り出す楓。それを「とお」と微妙に気の抜けた掛け声と共に真上に跳び、見事に奏は避けた。

「甘いぜメーブル。メーブルシロップ並みに甘いぜ。これだからメーブルなのだゲボグツッ！」

瞬間、奏の腹に白い何かが挟り込み、鈍い音と同時に一メートル吹き飛んだ。地面にまともに受け身も取れずに倒れ伏せる奏は、さながら浜に打ち上げられたマグロのようであった。

「しばらく死んでなさい」

本当にピクリとも動かない奏を前に、楓はすっきりした顔で腕を組んで立っている。宙が顔を引き攣らせその光景をまじまじと見ていた。文は慣れたのか苦笑をするばかりだった。

「そついえば宗一。和志は何処に行ったのかしら」

「覗きをやるうぜってうるさかったから、念のため黙らしておいた」

「なるほどね。ありがとう。感謝するわ」

「どういたしまして」

未恐ろしい満面の笑みの楓に、心の奥から恐怖が込み上げてきたが、「大丈夫、俺には害はない、蹴り飛ばされたりはしない」と自己暗示紛いのものを施しやり過ごした。楓の怒りは怖い上に身体的

にきつい。

……冷静に考えると、俺も和志に対して惨い事をしている気がする。次からは優しく接しよう。

「さてと」

楓はそう呟くと、首、手首、足の順番に回して体を軽くほぐしていく。彼女の背中からは良からぬ物のオーラ、例えるなら阿修羅のようなオーラが湧き出ている。宙が視界の端でがたがた震えているのを見て取れた。安心しろ。お前もじき慣れる。

岩場の蔭の方で寝かしておいた和志へと楓が歩み寄る。そして。

「はっ！」

「いたっ！」

和志の腹に思いつきり掌を打ち込んだ。俺、文、宙の顔が青ざめる。バチンと鳴ってはいけない類の音が耳に届いたのは気のせいだろうか。和志は何事かと咄嗟に身を起こし、きよろきよろと周りを伺った。

「んあ？ 楓？ 何で俺の部屋にいるの？ 夜這い？」

「死になさい」

アホな事を和志が口走った瞬間、楓は和志の頭を左手でレジャーシートに押さえ付け、左腕を軸に軽く宙に浮き、そのまま無防備な腹のド真ん中に、全体重を乗せた右膝をのめり込ませた。

再度意識を手放した和志を一瞥し、ふんと鼻を鳴らすと、何事もなかったかのように準備運動へと移行した。

一部始終を見ていた俺、文、宙は楓を怒らせないようにしようと、各々心の中で誓いを立てたのであった。

9月23日(1) (後書き)

クリスマス前までに何とか投稿できた。

クリスマスイブかそこらにもう一話投稿できるように頑張ります。

勉強どうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3948v/>

夢と願いの学園恋歌

2011年12月18日00時50分発行